

す。今年九十四になりますから、その頃、六十五歳でしたから。

米や小豆を買いためたり、買ったものを干したりしていました。

そして、ある日、突然、ヤマが、自分の眼の前に現われる、ことを

期待するかのようでした。

豊部隊、球部隊など、沢山の部隊が、何万と富古にやってきました。そういうことなど細かい近況を書いて、東京の兄の方に手紙を書いて送りました。すると、しばらくして、その封書は戻ってきました。熊本憲兵隊が検閲して、不合格になったということでした。

一々私たちの出す手紙までがしらべられていて、非常時をほんとに感じさせられました。

そのうちに空襲があるようになりました。

平良の街の東のはしにあたることの辺も、ほとんど疎開してしまった。この里でも、五軒ほどしか残っていません。私たちは、あのはげしい空襲の六か月の間も、ずっと、ここにおりました。

屋敷の中の菜園の片隅につくつた防空壕をたよって、くらしていました。

豊坂丸などがやられた日は、初め壕の中に入って、機銃をさけましたが、空襲は海の方だというので、外でていきました。港の上をやっているのが見えました。船などの動きはみえませんでしたが、煙の柱が上にとび上ってくるのが見えました。

それからというもの、もう船はこない、ということがわかりました。

母は、買いためてあつた煙草を、おとずれてくる兵たいにくれま

いました。壕はいっぽいでした。隣近所の人々が、うちの壕に入っているんです。将校が何といおうと、うちの壕は、隣近所では、一番の壕でしたね。

そこで、西隣りの親子の問答が始まりました。

母親が、「たった一機で、ボンボンやられている。日本は大まだ。」といいます。

娘子が、「これは艦砲というそうだ。海の上から大砲をうつているんだ。へんなことをいふと、憲兵にひっぱられるよ」と、いいます。

「憲兵だつて……。きいていやしないさ。おまえがいわない限りね。」そう母親がいふと、みんなして、どつと笑いました。

そうしているうちに、艦砲はけしきを増したようです。こわいものみたさに、壕の入口から顔を出して、東の方をみますと、もうもうたる土けむりです。木の枝が、暴風雨のときのようおどっています。木の葉がけむりの中で舞っています。すぐ、首をひっこめました。

終つたあとでみると、菜園の中に、帳面の大きさほどの破片がつきました。

そんなある日、電柱にのぼつたりして、下士官が電線をたぐっています。どうとううちの方にまでやつてきます。

どうするのかとききますと、軍が使うのだ。民間では電線はもういらんだろうと、うんです。母がやってきて、屋内だけはとらんでくれと頼みこみました。いつもうちにきて、倒をみてやつている兵たいです。ところが、いつもの人とは人がちがつたみたいですね。

した。小豆で、もてなしてやりました。自分の子どもも、どこかで、だれかに、こうしてもらつてあるだらうと考えながらでした。

ヤマは飛行機のりになつて、いることが伝わつておきました。

そういうわけで、墜落していくアメリカの飛行機をみても、手をうつて書ふことはできませんでした。

空襲のはげしい日のことでした。隣りの家族もうちの壕に入つているとき、道を歩いていた一人の将校もかけこんできました。

爆風で、壕の中に土がおちてきました。するとどうでしよう。将校がどなるんですよ。こんな不完全な防空壕は役にたたんと、ね。

帰るときも、ブリブリして、作りなおしておけといふんです。

ちやーんと役に立つたんですね。役に立たんといふんです。空襲のさ中にでも、出ていけばよかったのよね。みんなして、笑いかけました。

空襲は時間がありましたね。お屋やすみということがあるということもわかるようになります。飛行機が一機、高い空を飛んでいます。それで安心して、いつも通つている一〇〇メートルほどはなれた井戸に水くみに行きました。

すると、ズシンズシンという音がするんです。兵隊帰りの隣りのおじさんがきていいます。「ひどいことをするんだな全く。彼らは、自分らの兵舎に電とうをつけるためで、全く戦争とは関係ないことをしてゐるんだよ。」と。その後、その下士官は、うちにおじさん、これは軍艦からの砲撃だといつて走り去りました。ガラガラガラガラ、トシャンと、つるべをなげすてて、うちの方に、一心にかけだしていました。

疎開に行つた親りのいのしもで作ったでんぶんや、買いために節約したりで貯めた三斗の米とで、私たち母娘は、何とか食いつないで、終戦を迎えました。

そのうちに、アメリカ兵が、近所にも現われるようになります。アメリカ兵の一人が、アダン葉草履をもつている母をみつけ、手真似で、それを呉れると申します。くれてやると、あの日の丸（アメリカ煙草ラッキーストライク）を二個おいていました。うちにはタバコを吸う人もおりません。それで兵隊にくれることにしました。娘の方に行きますと、甘藷を収かくしたあとのいもかづらに三名の兵たいがたかつて、芋の葉っぱをむしりとつています。いたずら好きの私です。木のかげからそつと近づき、二個の日の丸をポイと投げました。

物音に、サッと三人は立ち上がり、落ちてゐる日の丸をジット見つめたまま立ちつくしていました。

島をうすめていた兵たいは、帰つてきました。港には、台湾から、本土から船が入つてくるようになります。母の嫁橋通りが、始まりました。ヤマの帰るのをいつかいつかと

首をながくして待っています。

だが、一枚の大きな封筒がきました。ヤマの戦死の公報でした。開いて、私は、「戦死」と叫んでしまいました。母は、その場に摔倒してしまいました。

その日からです。母が毎日泣くようになつたのは。

みんなといふときは、何かのまちがいだ、ヤマはからず帰つてくる、そういうて、元気そうにしているんですが、一人になると、泣いていたんです。天皇はにくいやつだ、私の大事なヤマを殺させていて、自分はのううと生きている。天皇がヤマを殺したのだ。そういうて泣いてきました。でも、去年あたりからは老衰で分別つかなくなつて、天皇のことも忘れてしまつたようです。たやすくなくばかりです。

戦死の公報があつても、位牌も作りませんでした。十何年もしで、遺髪が届けられたときも、母には内緒で法事をしましたが、母は知つてはいるんですね。こうして仏壇にヤマの写真をかざつてあるのは、母が寝こんでしまつたからです。

母は、あんただのよなヤマと同じ年頃の人をみると、はげしく泣きだします。あまり泣くので、「そら、ヤマがあんたを呼んでいる」と、いうのですが、また、泣くんですね。ヤマのために泣くために、戦争をのろうために母は、きょうまで生き続けているようなものです。

知覧の方から、特攻隊の碑をつくるから寄付をしようと呼びかけがきました。三か月ほどはためらいました。いろいろなことを考えてね。知覧という処は田舎なんでしょうね。役場という所なんできました。

夫を郷土防衛隊にとられ、昭和二十年三月二十八日に次女のお産をしました。お産にそなえて、非常用食糧としての砂糖麦粉それに薪まで用意しました。家に面どうを見ててくれる人手もなく、小さい子供達をかかえて出産直近かの体を察してか、夫は夜ふけてから山北部落の部隊を抜け出て来るのですが、分隊長がつれもどしに来るのです。「事情はわかるが兵隊のきまりだから」といつて連れて帰るのです。すでに二人の子がいました。上の女の子は小学一年生でしたが、空襲が始まつて以来、学校も一学期だけ出たきりで行けな

異郷まできて、氣を狂わしたのは何かね。あんたはどう思うの。

空襲下に出産して

平良町西里 砂川トヨ（二八歳）

ですから。そこへ、一円一万円おくりました。
なんでヤマ（故佐久田潤大尉）は、特攻隊など志願したんですね。結局馬鹿で、大死にさせられたんですね。あんな天皇のために何で、生命をする必要があるというんですかね。

空襲も終りに近づいた頃でした。

奇妙な恰好をした兵たいが私のうちにやつてきました。下駄をはいた兵たいです。気が狂つたんですね。

歌をうたいながら、町中の方に歩いていきました。

連絡をうけたのか、下士官がやってきて、そのあとを追つていきました。

くなつた。女の子の下に四つになる男の子がいました。臨月もせまつて子供たちのめんどうを見きれなくなり親せきの家にあずける事にしました。二人の子をつれてたずねた親せきは家にいません。防空壕にいると近所の人から聞きその壕はどこかたずねたら墓だといふ。子供を連れて墓まで行きました。墓の入り口はひくく、お腹の大きい私にはしゃがんで入る事ができません。入り口をのぞきました。ふだんはよく縁起をかつぐその一家が棺おけと一緒に住んでいります。骨っぽを背にして座つていました。身重の人がこんな所に入つてはいかんといふし、子供だけ頼んで預つてもらいました。

食糧事情も悪く、体のおどろえもあって大変難産をしました。生れたばかりの赤子のそばに寝ていてる時、空襲が来ました。足がはれて歩く事が出来ないのです。近くの壕に逃げる氣力も、体力もないまま、赤子を抱きかかえて頭からふとんをかぶりじつとしているしか方法がないのです。夫は四、五日帰つて来ません。

四月一日、今日はいつもよりたくさん飛行機が来ているからあとないと近所の人々に抱きかかえられ壕に入りました。今の琉球銀行の駐車所の所までよろめく様にたどりつきました。警防団の人たちが血だらけになつて石垣をとびこえて壕へ逃げこんで来ます。新世界映画館が爆弾でくずれ落ち、下敷きになつた人が助けを求めてうめいている。あれは源河さんの声ではないかといふ。機銃掃射が激しくて近づく事さえできないといふ。その頃から市内の無差別爆撃が始まりました。家に戻ると、窓ガラスは割れてくずれおち鏡台は倒れてこなごなになつてきました。暗くなつてから夫が部隊から逃げて帰つて来ました。市の中心街は人は住めないといふ事で盛加ガード

に行く事になりました。

途中、外間座お嶽の近辺は煙がくすぶり続け焼け残った家々もベシャンコになり、人間でいえば腸がとび出した様な状態になつていました。盛加ガードの井戸の洞窟は避難して来た人々でいっぱいです。壕の湿気にやられて体が次第に弱って行き、顔のむくみが出ていました。私にきこえる距離で、「この人はもつかねえ」という声がきこえるのです。わたしの事です。いつ死ぬか分らんにしても生れたばかりの赤子より先に死ぬわけにはいかんと、自分自身にいいきかせ、その想いの精神力だけでもちこたえました。この壕の奥には兵隊たちがいて中は弾薬庫になつてます。ここにいてはあぶないという事で、町の南部上角内会で焼けのこつた家をかりる事になりましたが、相次ぐ空襲で町はずれの家も危険となり山北部落に疎開する事になりました。

出産十日目、夫が馬車を借りて来ました。当時の金で百円出し、ようやく借りる事が出来たそうです。翌五枚と身のまわりの物とお産もすんで親せきから引きとつてきました子供二人をのせ、赤子を抱いて私ものりました。道はまづくらです。夫は馬車をおり、道にあけられた爆弾穴に落ちこまね様、城辺街道を誘導します。夜七時すぎに出発して、爆弾穴をさけて遠まわりしたり、カイ中電灯もなく真暗な道を六時間近くかかって山北へたどりつきました。今なら車でとばせば二十分くらいの距離ですが、農村地帯にはまだ家の生生活がありました。家の中で温氣の充満する壕に入らず、静養するひと時がありました。

山北へたどりついた翌日の夜、夫は部隊を抜け出して、壕に残し

て来た荷物をとりに行きました。あとたもなく荷物は形をとどめず、吹きとばされたいたそうです。直撃弾が壕に命中してくれおち何もないと戻って来ました。運が良かったのです。若しそこにいたら、命を失う所でした。

山北部落ではもっと堅固な壕を作る必要があると部落の北方スナ部落でバタと通称している所に各家から人が出て壕掘り作業が進められていきました。お産あがりだから作業には出なくとも良い、その代りお茶を沸してもって来いと作業を免除してくれました。

食糧がだんだん不足して来ました。道をへだて私たちの借家の向い側に部隊がありました。そこ兵隊達が、たむろして酒をのんでいました。そのつまみが、オーミガタ（羽のないなご）で、うまそうに喰べているのです。私もオーミガタをつかまえて来て料理して見ました。それまでには國のためという気持があつたし喰うものがなくともしかたがないとカタツムリをとつたり野の草をつんできたりしていろいろ喰べていたのですが、オーミガタだけは、口に入れてもゴワゴワと喉に引っかかるので行かないのです。お産あがりの体に栄養をもたらすものが無い時に近所の人が見かねて、卵を三二個くれました。あんまりありがたくておしいただく様にして戴き、これをお汁にすれば少しはお乳が出ると思うと、涙がこぼれる思いです。大事にとっておいた着物をお札に差しあげました。

浜から上がつて来る時の漁師がチン（石鯛）を一匹釣つて来るのを見て、額みこんで五円で買つて來たと夫がもつて来ました。そのお汁で、むくんでぐつたりしていた体に体力がつき始めました。子

供も、生れた時にうぶ湯を使わせたきりで以来一度も風呂に入れた事もなく、色は真黒になつてゐるのです。可哀相に思いながらも弱った体で水汲みに行く事自体が昼間は空襲があつて危険です。夜遠くはなれた村のばれまで汲みに行きました。水がめの半分汲んでおけば何とか一日はもちます。お茶の葉もなくなり朝、茶を沸してながら壕に行く生活に変わりました。空襲が早朝から終日始まる事時になつてとりに行くと、黒アリがいっぱいいたかつていました。さゆさえ飲むひまもなくり起きるとすぐに子供たちをせきたてながら壕に行く生活に変わりました。空腹感が日常化している子供たちはアリごとふかしいものをたべていました。

五月四日前十一時すぎ頃、地響きと共に大きな爆弾の音がしました。いつもと違う様子に目をかしげ近くの壕に逃げました。あとから壕にとびこんで来た人が、部落の兵隊が破片にやられて何名も死んでいるというのです。それが艦砲射撃だと分つたのは壕を出でからです。

その夜、小さな子供たちをかかえては、どこへ逃げても逃げきれないものではないとあきらめて家にいました。隣家の娘さんが、甲戦備下令だから女、子供の非戦争員は非常食をもつて夜のあけぬうち部落外に避難するようにと伝えに来ました。驚かされ通しの生活中でもその時はかりはもう胸がときどきして生れたばかりの赤子

れて背負わせました。もう一人の子にはハフタイ粉の非常食を入れて、せきたてながら、壕へ急ぎました。壕は部落中の人がいっぱいです。

明日は海上からだけではなく、落下傘部隊がおりて来る。おりて来た時は、ふらふらしているから、女子供でも動けるものは壕から出て、竹やりで突きなさいと部落の部隊長がいったとい。あはらしい話とその話を聞いていました。墜落された飛行機から山北の北の海上に落下傘で脱出した飛行士を大きな飛行機が飛んで来て、くさりの様なものをおろしてゆうゆうとつれて行く。何もわからん私たちでも、こんな戦争はもう負けると思つていてました。いつたいこれは何のための戦争かと考える様になつていてました。日本軍が宮古島に来た当初は甘藷の供出なども喜んでいたらしい部落の人たちは、『いもはないよー兵隊さん』といつて、かくしたりしていました。兵隊が別の部隊と食糧のうまい合いをして対立してけんかしているという話も聞いていました。

あの時生れた娘はもう二十八歳になりました。生れる前から墓穴をのぞかされ、生れて四日目の島の行事の赤ちゃんのためのユーカダキマスもせず、乳さえも充分にのませられずそれでも上陸してこなかつたおかげでまづくろなあかにまみれながらも育ちました。島におきた戦争のみじめさを私たちの世代は知つてはいるだけに平和のありがたさをしみじみと感じるのでした。

あよあよおち歩きなえせずに死ぬのかと思つうと可哀相でなりません。その時です「何といつて来たか」と隣室の家主のおじいがきく。「甲戦備だと、上陸して来るといつて」と伝えると、びっくりしてとび起き、あちらの部屋へ行こうとしたのかこちらへ来ようとしてか、やみの中でゴツーンと勢いよく、額を柱にぶつけてしましました。眼から火花でもとんだのでしょうか。「アガアガ、アガ、フタイやうとしニヤーン」とくり返しています。部隊を抜け出して来た夫が、「亭主のおじいがフタイをおとして探しかねている」いうのです。死を前にしていするのに思わず吹き出してしまいました。もう死ぬのだと覺悟しているのにおじいは下さぐりで大事にとつておいたらしくマッチ探し、神だなの前で、カンテラランプのあかりをつけお金をかぞえているのです。「おじいはグショードお金をもつて行くつもりだ」と夫がいう。兵隊たちにいろんな物を売つて、おじいさんはお金を貯めていました。明日は死ぬのだといふのに、くらがりの中で額を落し、ほの暗い灯の下でお金をかぞえている姿が、何ともちぐはぐでおかしくなりません。お腹の皮がよじれるまで笑つてしましました。そして考えました。これはこの世での笑いおさめだ。戦争が始まつてから一度も心から笑つた事がなかつた。といえば子供たちの笑つた顔を久しく見ていかつた。戦争とは可愛いそだちばかりの子供たちさえも、笑わなくなるのだと気がつきました。この世の笑いおさめにおじいのおかしな状景にぶかり心ゆくまで笑つたし、もう良いではないかといきかせながらも、何としても、生きたいのです。むずかる子供たちを引きおこし、帶しんで作つたりックサックに、着がえ一枚と先祖の位牌を入れ

私は開業医でした

平良町下里 奥平恵寛（三三歳）

上里先生や柴田先生のお年の方の二人と、齋原先生とを加えた三人を除いて、残りの島の医者、私を含めて六人は、昭和二十年二月に召集をうけました。

入隊したのは陸軍病院ではなく、新里国民学校（今の上野小学校）隣りの豊原部落付近にいた歩兵部隊でした。もっとも軍医予備員としての入隊でしたがね。

私は、兵役は丙種だったんですよ。入隊すると、小隊に配属され、普通の兵と一緒に生活をしましたが、兵の生活は、それはもう井戸の水をくんでいましたがね、当番を出してくんでいましたがね、部落の中にいながら飲み水にも不自由しますし、食べ物の方はそれこそ大変なものでした。

あとで陸軍病院の方に行つたんですが、医者としての所見なんですがね、軍の官古での死者の大部分は戦病死なんですね。それも、マラリアや赤痢など伝染病で、バタバタおれたわけですが、そのもとはといえば、何といつても栄養失調なんですよ。それはもう衰弱しきつていてね。

軍医予備員として歩兵隊に入隊して、私たちだけ特別な教育を受けたんですが、歩兵としての基本的教育なんですね。これには抗議しましたよ。「私たちは医者であって、医者には医者としてのやる

うことになつて、二度と召集されることはありませんでした。

帰つてきて、町内の下里の自分の医院で診療していましたが、隣りが爆弾でやられ、私の建物も、軍に接収されました。その後は、平良の町の人たちが疎開している添道の方にうつり、民家を借りて、診療に従事しました。

発電所主任、現場残留を命ぜられる

平良町西仲 下地玄幸（四八歳）

宮古電灯会社は、昭和十八年頃には電力の国家統制で、九州配電沖縄支店宮古出張所と変更されていました。平良市西仲のサッフィ浜の発電所主任として、その財産管理を命ぜられました。当初、四人いた現場職員も次第に台湾あたりへ疎開を命ぜられ、とうとう私一人になりました。

百馬力ディーゼルエンジンと六四キロワットの発電機が一基と六十馬力の木炭ガスで動かすガスエンジンがその財産のすべてです。

石垣島産の木炭を一晩で十俵も使っていたガスエンジンは当時は経費がかかりすぎるとして使用していませんでした。

ディーゼル油も軍部の統制下にありましたし、日ぼつか二時間だけの送電をしていました。

空襲にそなえて発電所建物のすべての窓に部厚い黒いカーテンをかけるのですから、ただでさえ温度の上がる建物は、それはもう、蒸し風呂のような暑さになります。

ことがある。どうせ軍隊で使うというんでしたら、陸軍病院に配属しる」と、いいましたね。

アメリカの機動部隊がウルシー基地を出て沖縄に向つた、というので、いよいよ官古に上陸するんだという情報が入ったんですね。それで戦闘準備ということになったが、そのときも意見しましたよ。「私たちは歩兵としては何も役に立たないから陸軍病院にまわせ」とね。そしたら言うことがふるつていた。

「とづべきぐらいでくるでしょう。突撃さえできればいいですよ」といつて、きき入れてくれません。「ええ、できますとも。銃に銃剣さえければね。」と。

そのとき見たんですけどね、私の見る限り、この部隊には何もないんですな。弾薬はなかつたんですよ。あるにはあるかも知れませんがね、いざというときにも見せません。小隊の中には機関銃などというのも見えないし、銃も満足にありません。あしたはもう敵がすぐくるかも知れない、というのにですよ。戦力のなさを痛感しましたよ。

ふだん、みんな天幕の中に住んでいます。壕も掘つて準備しています。ところが、その壕たるや、おそまつで、一人やっと入れるもの。これで戦闘ができるのかと、思いましたね。戦車でもくると、ひとたまりもない子どもだましのようでしたよ。

二週間ほどして、私たちは陸軍病院に移りました。今度は、軍医としての教育を一週間程受け、一応みんな召集解除になりました。しかし、六名のうち、福嶽先生と友利先生は再召集され、その後ずっと陸軍病院で働きましたね。私たちは、住民の診療に当れ、とい

という事でおさまりました。あの時は、隣接していた壕の真上にロ

ケットの直撃弾を落され、自然壕の岩板の厚さが、ロケット弾の貫通に力耐えてくれたおかげで、全員即死をまぬがれたのです。仲保屋町内会の人たちが二十名くらい入っていました。

あの日四月九日の空襲は特に猛烈を極め町のほとんどは大火災を起こし、軍事施設だけでなく、町の民家で形を原形のまま保つて建っている家は、数えられる程度となり、仲保屋内で全焼した家が十四軒ありました。

私の家は、前述鉄工所と道路をへだてて隣接していました。発電所から帰つて見ると、家がもとあった場所にないので。数メートルの南方にすれ、倒壊していました。

道路の真中に爆弾がおち、大きな穴があけられていました。その爆風で、家ごともちあげられ、圧縮されたマンチ箱の様になっていました。ひくい石垣をへだてて、その着弾地点北方には鉄工所構内に掘られた壕があつて、五世帯の人が入っていました。五メートル北方にすれば、壕の真上に直撃弾となる所です。

鉄工所を使用していた兵隊たちが機関銃をすえで対空警戒をしていた頃があったのですが、不思議に思うのは、彼たちが、山の方へ引きはらつた翌日からそこら一帯の猛爆撃が始まつた事です。軍隊のタイミングの良さに、感心するやら、それと知らずに、その引きはらつたあとに避難した近所の人たちが、あやうく全滅しそうになつた事に腹だたしくなるやら、複雑な気持になりました。

戦時下の物資不足が民間の日常生活で、食糧當面で配給制だつた玄米

もなくなつていた頃でも軍隊内部の輸送隊関係には食糧に事欠く事

はなかつた様です。

当時は手に入れようにも物がなかつたのに一斗入り食用油とメリケン粉を運んで来て吾が家にあづけ、宴会の用意を家内に頼んでいました。島では見た事もなかつた航空食糧の缶詰などもつて来たり、米俵を運んで来ておはぎを作らしたりしていました。

息子二人を兵隊にとられて、息子たちも、よその土地で、だれかの世話になつているかも知れぬと思い、バッテリー充電に来た兵隊の世話をしたのが、きつかけで知らぬ間に、兵隊たちの私設の酒保の役割をもおわされた形になつていました。

そのおこぼれにあずかつた事も事実で、戦争が終るまで、食事に事かく程の食糧には困りましたでした。用中という海軍航空隊の飛行機整備要員だった曹長が、サイパン島の生きのこりだとついていましたが、南方では日本はやられていました。日本は必ず負けるともらしていました。その人が連れて來た若い飛行兵が、中学を出て出征して行つた昔が家の息子たちの残していった本などを借りて行つたりしていました。借りた本を返し乍ら、明日はよいよ征くといつて、もう二度と会えないともらしていました。宮古島をとびたつて台湾沖で飛行機ごと、つっこんだのだと整備兵はあとでついていました。

戦争が次第に悪化して行くのがわかるにつれ、せめて女学校一年生だった末娘だけでも、本土疎開させておけば良かったと思つたのですが、もうおそいのです。昭和十九年度に漬水港沖に停泊したまま海上が潜水艦が出发して出港できないとして一週間も足どめをくつっている船に、ボートで毎日食事と水を運んでいるうちに、暑い船

底で、汗だくなつて、ぐつたりしている娘を見ると、一度は手ぱなす氣になつたものの、死ぬなら一緒に死のうと、下船させて來たのです。

昭和二十年五月四日、艦砲攻撃を受けた日に、家に入出していた兵隊たちが、トラックをよこして、明日は上陸して来るから、家族は部隊の近くに置いた方が良いといつて、家内と娘二人、それに知人の家族三世帯を、野原越、戦闘司令所の近くへ移動させました。

各家族、分散させて、天幕舎の中にその晩泊められた様です。まわりはゲートルを巻いたままの兵隊の中で、この人たちが守つてくれると思いつながらも家内は二人の娘をかかえてとうとう一晩もせず一晩をすごし、背をよせあつたまま、座して夜を明した様です。翌朝近く在する盛加部落の農家を借りて疎開生活が始まりました。町の中は、ほとんど人が見あたらなくなり、なるべく島の中央部に行つた方が、少しでも生きのびられると、夜、もてるだけの荷物を背おつて移動して行く人の列が続いていました。私は町の北方四キロの所、添道部落に本家の両親を疎開させてあつたので、そこへ身のまわりの品と家財道具を運びました。一晩に四往復しているうちに夜が明けてしました。

翌日、予想されていた米軍の上陸はなかつたのですが、間もなく無人化した町の商店街あたりには、残された家具などをもち出し、運びきる人々が出没して、全く無警戒状態が続いていました。

戦争が終つて、武装解除が始まつた段になつてから、未使用の銅線と、タイヤーをトラック一台分積んで来て、世話をなつたお礼にあげるというのですが、終戦の放心状態の中でこんなものをもらつて

「富占木工はズルイ」とたたかれた

平良町下里（当時地盛）狩俣寛康（四三歳）

白いモモ

年をとつてしまつて、何月のことだつたかよくおぼえていませんがねえ。私がうまれ育ち、そしてくらしてきただのは地盤という処です。そ

これは海軍飛行場と（陸軍）中飛行場とのちょうどまん中にありますので、運がよかったです。

九十戸も家がありました。焼けた家は一戸もありませんでした。

死んだ人もいなかつたとおぼえています。

東となりの山中部落も、ちょうど同じような条件なのですが、こ

こでは大きな不幸がありましたね。戦争中の想い出で、「一番心に残

っているのは、そのときみたものです。

その日は、山中部落の国仲家に、私たち夫婦は行きました。国仲

家の嫁にゆくという約束してあつた娘と、その母親が空襲で死んだ

ときいてかけつけたわけなんです。国仲家は私の従兄の家に当りました。

死んだ二人は、それはもうかわいそうな死に方をしていました。

母親の方は、舌を出して死んでいましたし、その長女の方は、口からも鼻からも血をふいて死んでいました。十九歳の女の子の白いふ

ともものあらわになつていたのが、いまでも、かなしみをさせいます。親せき一同で、オーダー（もつこ）にのせてとむらいをすませました。

そのあと、国仲家で、おくやみなどいて休んでいました。すると、また空襲です。国仲家の夫婦は自分らの家の防空壕に入りました。

その頃どこのうちにもあつた家庭用のものです。屋敷の外に穴をほります。二坪ほどの広さの方形の穴を、深さ四尺五寸ほどほ

り、その上に板をのせ、土を盛りにしたという簡素なものでした。そこに大切な味そがめなどは入れておきました。私たち集まつていた親せきの者は、そこへ入れませんので、馬小屋の中にかく

けんかとなつたわけです。すると、そこへ下士官がやってきて、大声で、

「富古木工はズルイ。戦時下で何だ。」と、どなりました。

班長を立たせて、ほおをぶつけてきました。銃の頭で、頭を二度もたたきました。

班長のイヌス兄は抗議しました。「何だ、おれも軍隊生活をやつたことがある。君がたたいたのは不当だ。説教からやるべきだ。」

そこで、軍曹は、一列にならべて、「それでは戦争はできません。」といい、次々にみんなをたたきました。一列に並べて両方のほおをたたきました。それは、とてもやしいことでした。みんなで、「お前のせいだ。」と、キナのカマレーをたたきました。

一か月分の手当は八重山（石垣）の郵便局でもらいました。一日当たり四円計算で三十五日分もらいました。

かえってきてからは、細あつめ仕事をしました。城辺町一円を古自転車をこいで、組集めをしました。

兵たいの出入り

戦争中、私のうちは、よく兵隊たちがやつてきました。近くに山砲の部隊がありましたが、（サツマ）イモはもちろんですが、ラッキョウをつくても、その下級兵たちがあさつてしまつたものです。可哀そうなものでしたよ。

うちくる兵隊は、何をくれ、これをくれと、よくせがみました。大野上等兵という炊事班長は、これらの兵隊に、「乞食をする

れました。

すごく大きな音がして、気づいたら、防空壕の方に直撃がおちていました。

行ってみたら、それはもう見るにたえない死に方をしています。

夫の方には、首から上がありません。女の方ははらわたがとびだし

ています。

そうです。私の耳がこんなに遠くなつたのは、そのときからです

富古木工はズルイ

防衛隊に召集され、手りゅう弾を投げる訓練をうけたこともあります。それが、わざかの期間でした。

私が、戦争に協力させられた一番大きなものは、西表島で、満一ヶ月働いたことでしょう。昭和十八年の九月頃です。

軍の作業がまことにあわず、大工や木工が微用されました。ダンベーにのせられて西表島に渡りました。各市町村から行きましたが、私たち平良町出身は第一富古木工班といいました。

私たちの班は、イシヌツヅ家（平良）のイヌス兄を班長にして十三名でした。白浜という処に住んで、毎日兵舎つくりの木工作業です。白浜からダンベーで迎ばれていき、高い壁に上つて木をきりました。そして兵舎をつくります。

そのときの想い出に、十五夜の夜のことがあります。私は酒はのめませんでしたが、十五夜だというので、軍から給与された酒をのんできわいでいる皆といっしょにいました。そのうちに、キナのカマレー

というのがおつて大声で叫んでいました。そこへ衛兵がやってきました。いやつもいましたね。

戦病死した息子

私は、寛次という息子がいました。うちではマツといつていまし

た。子どもの頃から体が弱く、病気がちな子でした。

それが、身体検査もしないまま、入隊させられました。昭和十九年の頃と覚えていますが、富古部隊でした。

初めて山中部落にいましたが、ついでソバ嶺の丘の方に移っていました。そのうちに空襲がはげになりました。マツは、スガーニ部落の西側の製糖小屋の処で、爆風に当りました。

それから、病気が重くなりました。入院させられたのは、野原越

にあつた衛生部隊でしたね。胃の病気だということでした。

「一九三二年」

「うちで療養させてくれ。」と、願いましたが、うけいれられず、とうとう衛生部隊で死んでしまいました。戦病死ということになり、今でも慰霊をもらっています。ほんと

卷之三

一
九
十九
九
九

豐國元年正月五十六歲

昭和十九年五月の初め頃、すでにできていた海軍飛行場のほかに新たに始めたツンマーの陸軍飛行場作業にかり出されました。

漁業に経験のある者を十名選び、飛行場作業のかわりに魚とりをしました。初めのうちは週二円くらいくれましたが、そのうち飛行場前まで馬車で運んだ魚を兵隊はただで持つて行くようになりました。

には陸軍が陣地を作つてあつた。爆音が聞えたかと思うと、海上を低空でとんで来た飛行機がいきなり部落に銃撃を加え、崎原家の娘

り、よろめく私を足掻きにするのです。家の者たちが驚き、泣き叫ぶ声で、隣近所の人たちが何事が起きたかと集まって来ました。あつという間に三十人位集まっていたと思います。「家族を前にしてなぐるとは何事か!」「魚と命がかえられるか!」人々の罵声が飛びかいだらぬさわぎとなりました。将校の手が腰へのび、拳銃を抜き出しました。私は撃たれる、もう殺されたと思ったが、銃口は空へ向けられ、ものすごい音を出しました。人々の声が一瞬静まりました。だが部落の人々も激昂していたのです。

ほどいていました。くやしいやら、情ないやらで思わず涙かほろぼろと流れたのを覚えています。

民間人立入禁止だった陣地の中へ部落代表の人たちがおしかけて行き、連れて帰る事を承諾させたといっています。

ピストルでおどした将校はサカヨリ中尉といっていました。戦争が終ったあとで聴いた話だが、サカヨリは復員船でヤマトに帰る途中海の中へとつて投げられて死んだと聞いたが眞偽の程はたしかでない。

ほとどいていました。くやしいやら、情ないやらで思わず涙かほろぼろと流れたのを覚えています。

民間人立入禁止だった陣地の中へ部落代表の人たちがおしかけて行き、連れて帰る事を承諾させたといっていました。

ビストルでおどした将校はサカヨリ中尉といつていました。争奪が終ったあとで聴いた話だが、サカヨリは復員船でヤマトに帰る途中海の中へとつて投げられて死んだと聞いたが眞偽の程はたしかでない。

兵隊たちは島に来た初めの頃は、この島の人は文字は書けるかな
など質問したり、見下げた様な態度でいた。

飛行機が天國の金星月不惑木星土星の折りたてやうにねまし
た。富國部落にチビヤーという屋号の家がありその友利イシタ氏
を若い少尉と伍長が、びんたをはつたり蹴つたりしているのです。

Eはその飛行場と立場たちはそのまま引きあげて行きました。命びるいしたと安堵していると、翌日の夜ふけ十時頃だったと思います。人々は寝静まつていました。兵隊が五人程で、寝ている私を引きだしたのです。夜道を物もいわさず学校南にあるタカヤマの陣地の中へつれて行かれました。雑木林の中にある松木にうしる手に縛りつけたまま放置したのです。翌朝、早朝から始まつた空襲機の撃つ機銃弾が目の前にある岩にはじけるのに、網をほどいてもくろれず、逃げる事もできません。顔見知りの兵隊が、水を飲ませて呉れましたが、陣地の中でもう、このまま死んでしまうのだと覺悟しました。縛られたままの腕はしびれ、夜が来ました。空腹のため意

所が、翌日、集合場所の飛行場前で、前日石採掘り作業を行つた人々の中から、宮国部落の人だけ前に出ると整列させた上、さんざんなぐられた。

はまだ童貞でしたか、妹をおぶついて機銃弾を受けたおれました。おぶつていた姉の方は即死し、背中の乳ばなれしたばかりの娘が助かったのです。

とつきの事とて、近くの道ばたにあつたガジュマルの木の下に逃げこんだ老婆は足を整ぢ抜かれ不眞跡となり、戦後もびつこを引いて

十九年三月以後は特に空襲がひどくなり、部落内にも無差別爆撃がございました。

が始まりました。焼夷弾が落ちると、あつという間にカヤぶきの家など焼けてしまう。兵隊たちはそれを消すのを手伝おうともしない。

海にもぐつて魚とりをしている最中に空襲機が来て、逃げ場もなない海の中で銃撃を加えられ、命からがら逃げ帰る事が相次いで起りまんこ。

ました
四月の初め頃だったと思います。特にその日は早朝から空襲が激
しかったです。

しかったのです。隣組長という立場で、漁労班の人選をまかされた私は、一家の生活の支えとなる人たちを海で死なせたら、それこそ魚どころではなく

い。その責任は皆、私にある。「もう魚とりには行くな」といいました。こんな激しい空襲にさらされているのだから、当然日本軍もやつこぐるまよぎこよつこへミノ。

分へてくれないはずだと思つていきました。
海へおりなくなつて二日目でした。兵隊を三人従えた将校が馬に
乗り吾が家の庭先へ入つて来ました。はじめのうちは、何か用が

入った事がなかつた。木に登つて見張り役をしたり、道を歩く者を大声で避難させたり、部落の警防団長の任務に忠実でありたいと思っていた。軍から牛を賣うから集めろと命令され、部落中の牛を名嘉山公民館に集めた。兵隊が勝手な値段を決めて、金の代りに債券を渡だす。それが領収書をも兼ねていて、それで終り。三百七円で牛を売つたのだが、結局、一錢ももらつていない。牛がいなくなると耕作用の馬を輸用といつて徵發して行つた。それもつぶして喰つたらしく、戦争が終つても返してこなかつた。

「アリガタメイワク」としかいよいのないひどい時代だつた。甯國部落だけで、空襲で死んだ人が三人、負傷した人が六名はいな。

父を連行された家庭

城辺村七又 砂川盟子（十三歳）

昭和十九年。小学校高等科の一年生でした。福嶺小学校は長間部落から移動して來た騎兵隊にとられてしまい、ミナコシや新城のブマーで分散授業を受けました。

二十年三月に終了式は学校の講堂で行ないましたが、式の最中に空襲があつて、式を中止し、逃げ帰つた。

四月になると校舎は度重なる銃撃を受けて穴だらけになり、校舎が目立ちすぎるから攻撃されやすすといつてその一部をこわし始めました。学校裏の松林には騎兵隊の馬がたくさんつないであります

が、松林の馬の群をめがけて、機銃掃射を加えていました。馬糧の入つてゐる麻袋が弾で穴だらけになり、こぼれ落ちたライ麦が青い芽を出しました。林の中の草を喰べつくした馬が、松の樹皮を喰いちぎり松の木はだが白く露出していました。馬糧もなくなり、草もなくなり繋がれたままのやせ細つた馬の群がわずかばかりの草をあらそつて、かみつき合い、けんかをしてたのを覚えています。学校近辺に近よる事が危険な状態となり、校舎は兵隊がどんどんこわして行くし、もう四月以降は授業は全く行なわれなくなりました。食糧と衣類が不足し、ぼろをまとい、いもの切りほし粉末をとかしたおかゆの様なものを作り喰つないでいました。

そんなある日、軍用トラックが家の門でとまり、「砂川の家はどこか」といながら四、五人はいつて來ました。その中の一人が土間の所へ入るなり、父の頬をなぐりつけました。

父はひざまずいて座つていきました。力いっぱい、叩かれた父が倒れ、正座し直したら、又なぐるのです。私はおそろしくなつて母にすがりつき大声で泣き出しました。母が私に静まれ、といふのですが何の事か何故、父があの様なぐられ方をするのか私はわからぬのです。そのうち着がえるという父をそのまま良いと引きたてて行きました。トラックに乗せられて、父は着のみ着のままで寒さの中をつれさられました。「今日穴掘り作業に行かなかつた」とあおい顔をした母がいうのです。翌朝、食事もとらさずに立たせてあるだらうからと弁当をもつて行く様に母にいわれ、ミナコシの登り坂の道まで行つた時、父が兵隊の車にのせられて来ました。「オイ」と弱々しい声をかけながらすれちがうのです。あの兵隊たちが

兵舎にしている城辺の学校まで行つても父にはこの弁当はたべさせられないし、その坂道から引きかえして来ました。元気のの良い父があの様な声を出すまで、顔がすっかりやつれきつて、自力で歩く事が出来なくなるまでいためつけたのです。泣きながらイモのベントウを下げて、帰つて来ました。私より先に車で運ばれて來た父は、頭から縫合をかぶり寝ていました。はれ上つた顔を子供に見せたくなかつたのでしよう。

そしたら、家にのりこんで來た兵隊になぐりつけられた上、家から連れ出されました。城辺の青年学校の南向きの門の所で、不動の姿勢で、保良部落の人も一緒に五名程、立たされた上、銃の基底部で、足をなぐるのです。つづけざまびんたをはられ、くらくらして、うしろへ倒れると、立ち上がりといふ。今度は石垣の所へ立たされ、そこからつきおとす。夜になると手を伸ばさせ、その上に椅子をのせ一晩中立つておれといふ。とても寒かったです。夜がふけると今度は、逃げ出さんと思つたのか、兵舎の中に入れて、ひざまずかず。特に兵隊の中にヤナンザ（悪い奴）が一人いて、そいつがひどかった。一睡もさせず、翌朝、家に帰れといふが、歩く事はおろか立ちあがる事も出来んのです。部落へ見せつけもあつたのだろう。軍用車にのせられて、家に運こばれた。

現役時代に中国大陸では「沖縄野郎」といじめられた事もあったが、この様なごうもんの経験はなかつたし今でも思い出したくな。

あの事があつて、しばらくしたら、待命召集が来ました。スナマスパリ（宇東仲添）に、たこつぼの形をした個人壕掘り、戦車を落とす穴掘り、その擬装作業、対戦攻撃訓練をさせられました。戦車の下部は弱いから個人壕の中にいて、それをめがけて爆雷を投げろといふ。模擬爆雷は箱に砂をつめて、本物の戦車で、訓練するのです。上陸して來たら、壕の中にいて、射撃、手榴弾の投げ方は、こうしろと教えるのです。敵の航空機が、グラライダーを引つぱつて來て、それをはなつ。それから落下傘がおりて來る。集結したら彼らは強いから、地上におりる前に追つて行つて、銃剣で突く様に

と教えられました。食糧は、玄米とソノム（穀類虫の事）が同量くらい。米つぶだけを選んで喰べるわけにも行かず、黒いチャンポン飯。シャリシャリという音がします。それも二十年の六月頃までで、それもなくなると食糧を自給自足せよという命令が出て、毎日、いもを植えた。植えて間もない、まだ未熟ないもを掘つたりしました。おかげは、時々、徵發して来たらしい馬の肉が出たりした。植えたいまが熟さないと食糧を供出を軍から命ぜられて初めのうちはいうなりに応じていたが、区長をしていた砂川恵昌氏は、部落内に割り当てて来た野菜、イモなどが不足して來たし、徵發命令を拒否した。集めようにも物がないといった。その日の夜、部落の西側にあるウンヌヤーの前の兵舎から着剣した兵隊が、部落に向つたという知らせがあつた。砂川恵昌は家を脱出していた。無人の砂川恵昌の家を兵隊は包囲して、ケビヤド（ススキを摘んで作った戸）の間から、床下にかくれてていると思ったのか家を銃剣で刺していた。夜、くらがりの中でプスプスといふかわいた音が西どなりの家から聞えていた。

七 又 部 落

城辺村七又 砂川マツ（三十八歳）

昭和十九年の十月十日の空襲以来、部落東地部の畑のそばに小屋を作つて畠はそこに住んでいた。干しいもを团子にして、畑のニンニクを抜いて来て、味噌にまぶしてそれが毎日の食事だった。夜に

ついていて、ノコの歯が入らないまま立枯れていたが、台風でみんなおれてしまつた。自衛隊というのが来るらしいが、あれはまた戦争準備をしでかすのではないか。

戦時下の保良部落

城辺村字保良 平良金次（三十九歳）

昭和十九年五月に中飛行場の工事が始まり六十一歳の父が作業に行つていて。老人では体がもたんというので、私も病弱な体だが父と代つて滑走路の整地作業に徵用された。

資材の運搬作業で、馬車班として、自家用の荷馬車もろともの徵用です。強行作業で夜は家にも帰らず、あかりをつけて夜明けまでの作業はつらかった。あなたの島の人々を守るためにだと言われ文句も言えない。

そのうち、大野山の水源地あたりから資材運びを命ぜられて、それが砲弾だと判りびっくりした。途中で爆発せんかと車のガタピンを気にしながら命のちぢむ思いをした。道は悪いしおまけにせまい。今のタイヤの車と違つて、鉄製車の馬車で夕方六時に中飛行場にたどりついた時は緊張してぐつたりつかれてしまった。おまけに手間賃もない。

十月十日の空襲が始まる頃は整地作業がほぼ終つた。耕作用の馬が馬車ごと徵用されてしまい隣家の馬をかりて来て農作業をしてい

なると家に帰り、麦をひいていもと麦の粉をませユニックマイを作り、明日の食糧を確保しておくる。それも初めのうちで二十年の初め頃からは、部落に食糧らしいたべものがなかつたが、兵隊は、味噌をくれ、いもをくれと毎日の様に来た。食事を作つていたら、戸を開けて入つて来ようとするので、「戸をワイーとつかまえて（しっかりおさえて）あけさせまい」と、番していた。兵隊のやり方はさもしかつた。初めのうちは、家の食事など分けたりもしていたが、ウヌヤーの前にあつた飯上げ班から兵隊が二人でオーケにかついで二人で食事を運ぶ。うしろの者が手すかみで喰い、次に前の者が交替して喰う。きたないやり方だった。兵隊もうえ死にしたのがいたが、民間人はそつを喰つて、はれたり、しほんだりして死んで行った。この部落民もそれを喰つて死んだ人がいる。そつは、よく腐蝕してからでないと毒があるので、それが乾燥する前に喰つたりして死んだ。

七又部落には爆弾が四つ落ちた。その爆風で、わたしの家はめちゃくちゃになり、柱に今でも破片が無数に入っている。大城長栄の家は焼夷弾で、馬小屋ごと母屋も全焼した。大城政良は馬を盗まれ、農家にとっては、大事な馬だったし、空襲の合い間にまだ農作業の出来る頃だったから畠を売つて、買って来た。その馬を微危きれた。わたしの所の山羊も盗まれ、馬は根間地前の部隊が徵發して行つた。五ヵ月後戦争が終つて返して來たが、肥ついためず馬が、骨と皮ばかりになって、よろめきながら返されて來た。隣の福横部落では、母と子が機銃弾をうけて死んでいる。

戦後、学校裏の松林を探切する事になつたが、無数の機銃弾人が地中に死亡した。

前田隊が会場（公民館）に来た頃には空襲は一段とほげしくなり牛の飼料の草刈りにさえ行けなくなりそのうち部落の中に無差別に爆弾を落し始めた。

朝食をとつてると、いきなり機銃掃射をあびせられた。西側のコンクリートの水タンクに弾がはじける音がした。屋根をつきぬけた弾が入り口の柱につきさる。裏座にいた長女は悲鳴をあげて泣きだす。まだ小さかった二男、三男四男の手を引いて、庭先の壕までたどるのにころんでは起きあんまりおどろいて腰を抜かし足が思うに歩けない。全くどぎもを抜かれた。空飛ぶ飛行機がいきなり

撃つて来る事をだれも見たことがなく知らなかつたし、近所に住んでいた姉のカニメガは、壕の入り口に爆弾をおとされ、生きうめになつた。飛行機が去つたあと部落の人や前田隊の兵隊たちが加勢して、かき出して壕の入り口をあけ、助け出しだが、左の頬に破片がささり顔中血だらけに息もたえだえになつてうめいていた。最近、ブルで壕のあとを整地したら、姉の使つていた横梯が出て來た。

青年学校

城辺村字保良 平 良 清一（十六歳）

青年学校の最下級生で軍事教練を受けました。青年学校は十五歳から二十歳までの五年制でした。上級生は仮想敵陣地をホーク前進で攻撃する訓練、下級生は伝令の訓練をするのです。青年学校の最下級生で軍事訓練を受けそのあと福南部落の西のバダ（谷）で戦車の避難壕掘りの作業に徴用された。横穴式に山の斜面を掘り松木を伐採してそれで壕の入口を擴装するのです。戦車は二十台くらいいました。その作業がすむと中飛行場と西飛行場の作業について行かれた。

昭和十九年九月頃下地にあつた西飛行場では保良から通うのに遠すぎるため沖縄製糖の倉庫に麦わらをしいて、それが寝る時も唯一の敷物です。朝六時起床、人員点呼、軍人勅諭をとなえ、それから日が暮れるまで地ならし、土遊び作業が始まるのです。支給されるわずかばかりの食事では腹がへつて寝る事も出来ず夜九時の点呼

特に小さい子供たちは、目に見えて顔色が悪くなるのがわかりました。そこにさえも入れない人たちは、保良泉の下の大きな岩のかげに避難生活をしていました。

空襲

城辺村字保良 平 良 金四郎（四六歳）

昭和十九年十月十日の初空襲で屋根を機銃弾が穴だらけにしたので瓦を焼いている所もないあちこちから古瓦をさがして来て修理したのもつかの間、今度は焼夷弾で家ごと、家財道具ごと根こそぎ焼かれてしましました。軍の徴用で、部落北部の陣地に松木を運ぶ作業を命ぜられ部落内に煙が上るのを見たが帰つて見ると家がない。長女の栄子は福里の野病院に見習い看護婦で徴用されているし、幸い、小さい子供たち四人は畑に遊びに行っていたとの事で、無事だったが、室内が一人で家にいてもちら出せず、身一つで庭の壕に逃げるがせいいっぱいだったといふ。

空襲があつて、焼夷弾がおちたら、つかんで庭に投げて、それに砂袋をかぶせるなどと防空訓練と称して教えていたが、とてもかぶせる余裕などありません。焼夷弾を落したあと、機銃掃射をするのですから。室内も、あぶない所を命びろいしたのです。私の外に家を焼かれた人は、平良武男氏、砂川良雄氏、新城よし正氏、砂川金徳氏、下地義一氏宅など外三軒がその後の空襲で全焼した。燃えないまでも松川寛喜さん宅には屋敷の東側に爆弾が落ち家をめちゃ

が終るのを待つて、一応寝るふりをするのです。上野村に親戚がいるのを思い出し、夜中に脱出しました。オーバリまで夜道を歩いて行きました。空腹もひどかつたが、なま水をのむ事と水浴をマラリア予防のためといって禁止されていたので、そこで水を浴びる事でくたくたになつた体がいきかえる思いでした。腹いっぱいにいもを喰つてそれから帰り不思議にとがめられぬよう便所からもどるふりして寝るのです。毛布が足りないからチヨンガ（麻の砂糖入れの袋）をかさねて、それをかぶりました。栄養失調と過労からマラリアにかかりましたが、結果として私はマラリアにかかる人が続出しました。徴用二十日目にとうとう私もマラリアにかかりました。寒気がしたかと思うと高い熱が出てガタガタふるえ、とまらないのです。衛生兵が薬を飲ますが、それでも治らず一週間もする頃には、やせほそつてしまつて、父が馬に乗つて魚と馬肉をもつて来ましたが、それを喰べる気力もなくなつていました。意識がもううとしている毎日が続きました。家に帰つて養生しろと帰宅命令が出て馬車にのせられ保良に帰つて来ました。家で療養したのですが、漬もろくにないし、バショウの幹をつついで冷やしたり、そのしるを飲ませたりしているうちに、倉庫の生活よりは吾が家は環境も良いし、少しずつ良くなりました。所が部落の字長が時々見まわりに来て、良くなつたら又、作業に行く様にと、軍のいつけだからとついていました。そのうち空襲が、一層激しくなると保良部落の南西方面にあるチビピスカアブ（穴）や東部のナナカサアブに避難しました。ナナカサアブは四メートルくらいはしごをおろしそこから横穴式になつてゐる自然の洞穴です。空氣の流通が悪く、二日もいると人の顔色があおくなります。

めちゃにされました。

二十年五月四日の艦砲で攻撃を受けた時、ずらりと並んだ十三隻の黒い軍艦から一せいに砲弾が飛んで来るのです。部落中の人がもてるだけの荷物をかかえて、ころびながら壕に逃げるのです。ものすごい地ひびきでした。兵隊たちはとりぱりて（意氣消沈して）もう上陸されるのだといふし、もし、上陸されていたら、島出身の防衛隊の者が、魚の釣餌みたいに、最前線に立たされて、まっさきにやられていました。その日は部落は直接の被害は受けなかつたが、十九年十月十日以来、部落でも機銃弾で、死者やケガ人が数多く出ました。日本軍の弾薬運びの事故にまきこまれて爆死した幼児などもいます。

城辺村字保良 上 里 マツエ（四十歳）

部落の中央部に兵隊が壕を掘つていた。壕掘りの責任者が木山軍曹という人で、その人の名で、部落の人は木山壕と呼んでいました。夫は特命召集で宮原へつれて行かれるし畑仕事も私がしなければ喰つて行けない。平良みつえさんという子守をやとい、二歳になる末の子の弘子をあずけた。昭和十九年二月十三日、夕方畑仕事が帰つて乳を飲ませ、すこし遊んでおいでといって、夕飯の仕度をしていた。しばらくすると、部落中が地響きする様な爆弾の様な音がした。飛行機の音もきこえんのにどうしたのだろうと思つていた

ら、うちの子が、と知らせて来るのです。足がくぎづけされた様に動けなくなり立ちすくんでしまった。

木山塚には弾薬箱が入っていて、それを移動するため五、六人の兵隊が弾薬箱を荷車につんで運んでいた様です。子守の子を使つて兵隊は卵などを貢わしていた事があつたし、仲良くなつた子供は、その兵隊たちのあとを追つて遊んでいたのです。ごとごと押している荷車の安全ヒモがはずれ、弾薬箱が路面に落ち、爆発したのです。荷車のあとかたもなくふとばされた現場は、道ばたの立木も黒くこげていました。現場から遠くなれた所に、子守りと共にふとばされて弘子はたおれていました。ぐつたりした吾が子をかかえて、狂乱状態で家につれて来ましたが、ほとんど即死だったのです。子守の平良みつえちゃんも四、五日してなくなりました。五人の男の子の末っ子に生れた女の子で、夫はようやく娘が出来たと喜び自分の名の弘をとつて弘子と名づけ自から髪の手入れをして女子らしく育てるのだといつてオカッパにしてやつたり、オシロイをつけてやつたり、たいへんなかわいがり様だったのです。娘が死んだ翌日、夫が帰つてきました。寝がえりをうちながら弘子弘子と呼びつづけるのです。やけ酒を飲み、墓に通いつづけるのです。気がふれた様になつて、それがもとで、病の床にふし、二十年五月には夫も死んでしました。

シゲマツ、村山という二人の兵隊も即死したが、生き残つた南軍曹という人が後日見舞に来て耳はきこえなくなり自分みたいに不具者になるよりはよかつたかも知れないと慰めていた。いくら慰めても死んだ幼子は帰つて来ない。ガタピシの悪い道路を危険物を運ぶ

のに子供たちを迷さける事さえしなかつた。部落のまんなかに弾薬を入れる壕を掘るくらいだから。

その後、子守をしていた子には、戦争協力者といつて、年金が出ている様ですが、私の子にはない。私の子のいのちは別ものだろうか。

七歳の記憶

平良町　友利　秀（七歳）

空襲は一年生の半ば頃に始まった。（昭和十九年十月十日）学校は兵舎にとられ、疎開して空屋になつた家が町の中にたくさんあつたしそこで授業をした。北小学校の東の通りを北へまっすぐ行つて交叉するあたりの茅葺の家で、幽霊が出そな気持の悪い所で、その通りは特に陰気な感じがしていた。小さい椅子を机にして、バシヨウの葉を乾燥して編んだ坐布団を床に敷いて勉強した。最初の空襲はちょうど勉強中に「空襲警報」があり、かおる先生の家の通りを逃げ帰つた。無事に家へ帰り着いたが、それから学校はずっと休み、一年の終りの修了式は町の東部の飲料水泉として使用されたムイカサーの広い洞窟の上で行われ、その時いつ空襲があるか危険だからといって母にとめられて私は行かなかつた。「絶代で呼ばれたのに、行けなくて残念だつたね。」と四年生だった兄に言われたのを覚えている。空襲はますます激しくなつて、二年の初め頃は特に激しさを増し、五月頃の梅雨時に艦砲射撃を受けて、雨

に濡れながらその夜真暗な道をタナバリに逃げた。それも初めての事であると艦砲射撃とわかったのですが、私たち家族はいつも調子で防空壕に入りたがらない父をおいて、庭さきの壕に入つたが、地響がだいぶひどくなつてきたので近くのおだけの大きな福木の下にある隣組の防空壕へ逃げた。いつになくその日は激しく「ドン」という音がして、ふわっと体が浮くような耳をさすような爆風があつて、一瞬皆かたまつて抱き合つた。その時母が「あれはただごとではない。ああ、ウヤ（父）ステイサインが。」といつた。さすがの母も「アガイーウヤはステイ。」と何度も言つた。「これが艦砲射撃というものか。」と恵勇兄が言つた。「ウヤはステイよステイ。」といって、家へ戻つてみると、さすがの父もしょげかえつていた。「アガイーウヤ（父）はモウケドオク」といつておふくろは泣いて喜んでいた。私たちが壕へ逃げたあと父はゆうゆうしていたらしいが、ファットの音にこれはただごとではないと驚いたらしく。隣組の話合いで各家庭は防空壕を作ることを義務づけられていたが、おやじがそんなものはいらないと言うのを、おふくろは皆が作るのは作りなさいと言つて強引に作らせた防空壕で、父は命びろいした。そこはふだん使うことはなく食糧倉庫のようになつて残つていた。その時四斗ほどの大豆の俵を担いで逃げ込んだとのことで「いざとなると、人間はアリヤーミーン（ありもしれない、いたした）タヤ（ちから）が出る」と父は言つていて。それから避難なると父は一緒に逃げるよになつた。

艦砲射撃を受ける前に、家は十・十空襲で壁板は殆ど裂け、ヤリギン（破れ物）を見るようで家の柱には機銃弾の貫通したあとが今でも残つている。「ウカース（こわい）弾がピスキ（穴を開けて）ピリウキバ（いつたんだよ）イーバードウ（よかつた）クマンナ（ここには）ウリウカン（おらなくて）これがあたればスニドウク（死んでいるよ）」と兄が言つていた。弾の貫通したあとは人間の指が入る程度のギザギザのまるい穴で兄は指を突込んでみたりしていた。家の壁の殆どがなくなつていたので今まで見えなかつた海が直ぐ近くに見えた。艦砲射撃の前に三月頃隣の天理教の大きな建物もやけてなくなり、家族を台湾疎開にやつた若旦那がひとり残つていた。おやじもおふくろも信心深く天理教を信じると良い事があると言われ、毎朝毎晩なり響く祈りの太鼓の音に目を覚し、一日の無事を「天理教のみことー」にたくして拝んでいたのに、あまりにも無残に空襲にやられたのをみて天理教の威厳もがた落ちとなり、さすがのおとなしいおやじも「ナウユガミ（そんなもの）オガマッティ（拝むものか）。」と言つた。母も「アカンバ（ああもういやだ）オガマン」といつていた。天理教の焼けあとの中には爆風で飛んだ大豆が雨にぶられたりして芽を出していたので、おふくろがそれを拾い集めて味噌あえにして食べさせてくれた。おふくろが天理教の若主人に「あんたとのマミナ（もやし）を食べているよ。」と言うと、若主人は「こんなにひどい空襲にあつて悔しい、天理教教会が焼けて苦しい。」と言つて泣いていた。「マンティ（ほんとに）カサマスムヌヤーサー（やりきれない）」とおふくろもあんなこと言つていたあとなのにつられて一人して泣いていた。日

頃頼母しいと見ていた若主人が毎晩焼けあとにたたずんで浪花節様の歌をうたいながらさめさめと泣いているのをきいたことを子供心に覚えている。

連日の空襲にあって町は焼かれ、夕方から雨が降り出した。しどしと降り続ける真暗な夜道を人々は荷物をまとめて田舎の親戚縁者をたよって引越して行つた。母は落着かない様子で門の所へ出たり戻つたりして「アガイ（ああ）バガサト（わが里）や焼きにやーんやー残念なもの」とふるえながら言つてゐた。

昭和十九年八月頃、島にはおれないということで私たちも台湾へ疎開することになつて、トランクとか柳行李とかその家にあるような気の利いたものもなかつたし麻袋に衣類を入れ始めた。父は島に留るというので母が泣きながら「残念なむぬやーあんたはひとりでツクル（ほつねむ）としているべきか」とい、父は「他の家も男は皆そうしているし宿命だから……」と言つてゐた。半ば強制的に軍から疎開命令が出でていたし、行くか、行かないかで家の中は揃めぬいていた。そこへ「どうして父をひとりおいて行くのか、私たちだけが行くのか」と、一言いつたら、「もう皆行かん。」といふことにきつた。幼児の声は神の声という信仰みたいなのがあつたからだと思う。当然行くべきものと半ば決まつてから帰つて来て「どうしたのか」と父がきく。「ヒデがそう言つてゐるから行かん事にした」と言うと、父はつっこり笑つて「そうだったか」とその日かつてそんな事は無かつたのに私をだっこして寝た。「カヌシャガマヨー（かわい娘よ）」と言つて。何時も母に抱かれて寝ていたが、父と一緒に寝たのはその晩が初めてでした。

空襲さけ朝夕だけの分散授業

平良町西里 山内朝源（三九歳）

台湾疎開者を引率する

軍はやつてくるし敵のグラマンが時々上空に姿を現わすようになつて、私ら男子教員は夜間勤務を命ぜられました。平一校の屋根にのぼり監視をしました。ある晩、敵機襲来だといつて警戒警報が発せられました。すぐ屋根からおりて校長室へ行くと、池村校長は「御真影（ごしんえい）をどうしようかと心配する、私らは日ごろの訓練通り砂袋を準備したりバケツに水を汲んで並べたり、竹槍をそろえたりしました。さいわいその夜はそれですんだけれども、確かにそのころ（昭和十九年七月）から人心の動搖がみられるようになりますた。

役場からは、敵の上陸もあるかもしれないから、女や子どもたちはどうしても疎開しなければいかんと、本土疎開・台湾疎開について町内会を通して呼びかけていました。学童疎開の通知もきました。

校長は引率には「若くて元気なもの」をと、個別によんで説得を始めました。私もよばれたが、一夜考えさせてくれと言つて返事をひかれました。家には六十歳をこす母がいるし、五年生をかしらに六年の子どもがいる、これだけの家族をつれて寒いところで過ごせるだらうかと迷つたものでした。一方では弟や妹が台湾で教員をしていて、疎開するなら台湾へ来たらといふ等もあったので、翌日ことわりました。それでもなお再考をうながされました。結局、平一校からの学童疎開は三十名余りで、引率は高里先生に決まりま

台湾疎開をとり止めた私たちは近くのサッフィ海岸の波打際に面したかなり奥行きの深い自然洞窟に幾組かの隣家の人々と一緒に避難した。洞窟は墓に使われていたらしく骨壺がいっぱいしまつていてそれを枕辺に置いて寝た。恐かつたが空襲に来る飛行機はもつと恐かった。時々敵機が去るのを待つて浜辺で釣をする老人がいたが爆風を受けてうつぶせになつて死んでいたという。すぐ恐ろしいと思った。おふくろが「釣に行って人が死んだので、海辺へ行くな。」と言つた。人々もその頃になると釣りなど出なくなつた。軍用船にのつていた丁さんの家は裕福で、珍らしいお菓子などをもらつて食べたことがある。墓の中でお座があつて赤ん坊の布団もその頃には珍しい花模様のはなやかなものだつた。空襲の合い間に布団を干すと、ちようちようがとんでも来てその布団にとまつた。「ああ布団の模様の花にちようちようが止まつてゐるよ、おもしろいね。」とはしゃいだ。それは小学校二年生の私にとってしまつぱい墓穴生活でのただ一つのほのぼのとしたのどかな思い出。今こうして平和な時代に軍備だ、自衛隊だという政府のやりかたにもう少し衿を正して考えてほんてはと思う。いやな戦争を想い出すことにさえ背中が冷えるおもいです。

四、戦時下の教育

1 学校現場の状況

した。

一般の人は待ち切れなくなつて縁故疎開をはじめました。台湾へ行くのが多かったです。いわゆる集団疎開は縁故のない年より、婦女子が多かつた。そういうしてゐるうちに今度は台湾行きの学童疎開を編成するはなしが出で、これは希望者が多かつたようです。台湾ならばよからうということでおはなは引率を引きうけることにしました。ところが校長からたびたび県の学務部長に電報照会するけど、なかなか返事がこない。大分あとになつてから台湾への学童疎開は認めないという返事がきました。次に出口町内会から台湾へ行く一般疎開者の引率者がいないから引き受けてくれと、町内会長に言わされました。この方は家族も行くことだし、よからうとあつさり引き受けました。ところが校長に休暇をだしに行つたら「必ず帰つてくるんだよ」と念を押すのです。勿論帰つてくるつもりでした。

出発したのは八月の末、暁丸とかいつたようにおぼえています。各町内会ごとに疎開団を編成、責任者がついていたが、私が引率した出口町内会は年よりや婦女子ばかり六十人くらい。おばあさんなんかはみんなアダン葉ゾウリをはいて、小さな水ガメを持つのもいました。一斗ぐらいは入る水ガメ。台湾にはマラリアがあるから古の水を持っていかんと厄いと言つてね。それを頭にのせて、さらになべや茶碗、もういろいろのものを持てるだけ持つたおばあさんがつづいていました。それによばは方言しかわからない。途中は敵の飛行機や潜水艦を避けるとかで夜間航海。昼は石垣に隠れたり、与那国に隠れたりで、ようやくキールンに着いたのは菖古を出て七日めでした。その間、たくさん的人が船酔いするし、小さい子

どもは甲板でうろうろしたりで大変でした。キーレンのまちはまだ

空襲をうけておらずりっぱなものでした。おばあさんたちは「りっぱなまちだ、りっぱな建物だ」とよろこんでいたが、いざ上陸となると、水がメを頭にのせて、ゾウリは脇にはさんではだしになつて歩きだす。「アタラカカイバ、サバア、ムタダカア、ナラン」（アウリは勿体ないから持つ）と言つてね。そういうかつこうで市街を行列、市役所の案内で大きなお寺のようなところで休憩しました。

そこで宜蘭から迎えに来ていた妹に家族を託して、私は疎開者を

つれて汽車に乗り嘉義をへて台南へ行きました。市役所の案内で長仙樓とかいう大きな料理屋に泊りました。そこで二泊して、あと

一便さきに宜蘭から来ていた長田さんたちに頼んで帰ることにしましたが、家族のいる宜蘭によつて、学校に電報をうちました。

ちらには学童の疎開もたくさんいるしできるだけ止どまりたいと。

そしたら「せひもどれ」判コを押した公用電報が返つてきました。

それに家内の兄の龜川恵信（医師）が「学校から公用電報がきていたのだからもどれ。家族のことは心配するな。日本はきっと勝つから、勝つたら迎えにこい」と言うし、とうとうしる髪をひかれる

思いで帰ることにしました。

オスウから池間の漁船宝山丸が出るときいて、それで帰ることにしましたが、何日も天氣のつごうで出ず、そのつど宜蘭とオスウを往復しました。そのとき疎開者を訪問して帰る長浜恵信さんや下地一雄さんらと一緒になりました。三・四日めの夕方ようやく出港したが、その晩から大変なしきになりました。与那国を過ぎるあたりから船は木の葉のようによれる。若い船長だったが、「これは台風

これから新たな貢古での生活が始まりました。

空襲下分散授業で死を覚悟

学校は軍に接収されました。疎開しなかつた子どもを集めて勉強はあちこちに分散してやりました。校長が大三俊の下地徹さんの家を借りていたのでそこを職員室というより学校事務所のようにして通いました。生徒は仲間御嶽、龜川医者の家、アツママ御嶽等と分散していましたが、私は高等科（女生徒のみ）をうけもつていて神屋の立津元康さんの家に机、腰掛をもちこんで勉強しました。しかし空襲警報や警戒警報が出来れば休みだし、ふだんは五・六人、多いときは十人くらいしかこなかつたです。平一校全体が集るとときは事務所からも近い仲間御嶽の松林を利用しました。勉強の途中で空襲警報がくれば庭の防空壕に入つたが、これでは親も不安だったのでしそう。生徒はだんだんとなくなりました。來ても朝とは限らず、昼たり、夕方たりで不規則でした。

時間割も本を読むとか、算数の計算をするといつたいで一定しない。勿論学用品もなかつたし、服装もボロボロ、だれもが食べものにだけ気をとられていきました。

いろいろな理由—多くは経済的な理由—で疎開しなかつた平良のまちの人びとも、空襲がはげしくなるにともなつて、島のなかで縁故をたよって疎開を始めました。添道、久松、下地、城辺とあちこちに散つていきました。伊良部に疎開した人たちもいます。多くの人は市街地がやられると思っていましたから。ぼくらがやつてきた防空演習は何の役にもたたなかつたですね。焼夷弾が落ちてももう

だ」という。何しる無線もないから台風だろうが突然やつてくるわけです。土砂降りはともなう。海水はどんどん入りこむ。三十人くらいの乗客はみんな船酔いで、どんどんあげていました。そこへ船長が「みなさん、もう覚悟してください」という。驚きました。これはあげるどころじゃない。それからみんなはハチマキをしめて、どうしたらいかと船長に聞くと、石垣島が見えるはずだが一向に見えん、船の位置がはっきりしないという。そのうちに夜明けが近いのか、前方にかすかに島影が見えてきました。もうどこでもいいから着けてくれと言つて、船を浅瀬にのしあげて下船しました。

石垣島のずっと北の端で、小さな部落がありました。伊原間と言つたかな。貢古の人も一々車いました。台風の過ぎるまで二晩いました。そこで牛を二頭つぶして食べて元気をつけ、二・三斤ずつはおみやげにもしました。嵐もしずまつていざ帰ろうとしたら、スクリューが折れている。修理のできるところではない、そのまま山発しました。しかしちつとも進まない。早朝に出て、翌日夕方遅くなつてから漣水港（現在とのみや商店の下）に着きました。四十時間はかかったようになります。

親越の坂をのぼりきったところで、あつとおどろきました。一ヶ月余りまえ貢古を出たときはあれほどきれいに立ち並んでいた平良のまちがすっかり焼けてしまい、ずっと東まで見渡す限り焼野が原。十・十空襲の後に帰つたことになるわけです。出口町内会一帯も焼けていたが、さいわい私の家は建っていました。しかし家族はだれもいないし、親戚の上里忠勝（医師）のところに仲間入り。このお父さんもダメだと覚悟を決めていたということでした。

私ももうそのころには覚悟を決めていました。受けもちの生徒たちも「どうせ死ぬなら、先生と一緒に死んでもいい」と言つたりしてね。まだ米軍がどこに上陸するかはつきりしないころで、私も米軍が上陸したらこの子たちと一緒に死のう……。そんな気持ちになつていました。そのくせ寄宿さきの上里医者が悲観的なことを言うと「いや日本は勝ちますよ」と言つたりしていました。上里医者は「考えてもみなさい。ここまでアメリカが攻めてくるのに勝てるはずがないじゃないか。ここは日本だよ。敵が日本まで来ているのに勝てるはずはない。」こう言って全然相手にしないのです。

「御真影」の当番というのもありました。宮古の各学校の御真影を野原越の司令部近くの洞窟に安置して、毎日二人ずつ交替で当番しました。朝から夕方までと、夕方から翌朝までの十二時間当番で、夜は洞窟のなかでローソクをつけての当番でした。そこへ通常のが大変でした。あの辺一帯は軍が相当駐屯していたせいか敵の飛行機の攻撃もすごいものでした。往復はとてもこわくて、穴に入ったり松林に隠れたりで、当番はみんなひやひやしたものです。校長たちの「御真影」にたいする尊敬はそれは大変なものでした。それだけに当番についてはやかましいわれ、空襲下を通いつづけました。戦後間もなく「御真影」は全部の校長立ち会いで焼いたそうですが、多くの校長が声をあげて泣いていたということでした。

戦意喪失の兵士たち

民間はもう生きるだけが精いっぱいの日々でしたが軍もひどかったです。空家になつた民家に入つて疊などをかつぱらつていく。まるで盗みあいでした。それに芋や食べものを盗んでいく。兵はみんな栄養失調になつていきました。添道にいた一般兵卒はみなひよるひよるやせているのに、小隊長とか中隊長というのはふとついていてね。そういうひよるひよるやせた兵卒をムチでたたいて掘りをさせていました。ムチでたたかれて盲目になつた兵隊を使いみちがないから穴でも掘れといつてね、手さぐりで穴掘りしているのをうしろからビシビシたたく。軍隊とはこんなにもこわいものなのだと、おそろしくなつたこともあります。

添道には海軍の部隊もいたが、そこで沖縄特攻に行くんだという

少年航空兵を何度もみました。あすは特攻機で飛ぶんだといつて酒盛りをしている。翌日の未明にはもう練習機みたいな飛行機がよろよろと飛んでいく。まったく頼りない飛び方で、下で見送っている兵隊は「沖縄島には敵機動部隊がたくさんいるそだだから、奴なんかはあと一時間のいのちだ。つぎはぼくらの番かな」とはなしたりしていました。食べものもなく、戦闘力ももう心細い。気が毒なものでした。これでほんとうに戦争ができるのだろうか、これが日本の兵隊なんだろうかと思つたりしました。だから上里医者が「もう戦争は駄目だ」と言うのを聞いて、確かにこれでは頼りないなと思ったこともあります。

ところが参謀や連隊本部なんかは非常に強気でした。自分たちには豊式高射砲というのがある、実際に敵機を落したことがあると言つて強気なところをみせる。確かに一度は落としたこともあるそうですが、そのときつかまえた一人か二人の捕虜を銃殺したというはなしも聞きました。こうして士気を高揚するためにさかんに大丈夫まだ大丈夫だといつてはいたが、実際毎日みる兵隊はとても戦争できるような状態ではなかつたですね。

輸送船は平良港でもたびたび爆撃されています。食糧もやられると、武器弾薬を積んだ船もやられる。はじめは敵機がくるところからも撃つてはいたがその後沈黙して駄目でした。手りゅう弾さえないと言つっていました。隊長は防衛隊の分まではないとさえ言つたりしていたのですからね。

しかし部隊によつてもいろいろ差はあつたようです。艦説をもつてゐる部隊もいました。海軍はわりとぜいたくだと言われていた昭和二十年もくれて翌二十一年一月、ようやく平良町の石原町長が疎開者の引揚船を仕立てて迎えにきてくれました。それで一家そろつてただで乗せてもらい、ようやく四か月ぶりで宮古に帰ることができました。

水道人夫になり台湾引揚げの船賃かせぐ

敗戦については、十六日か十七日かに学校事務所で校長にきかされました。かねて「絶対不敗、日本は神國なり」と言いつづけてきた校長から聞かされたときは、信じられない氣持でした。敗戦のはなしが一般に広まつてきたころの兵隊のよろこびは大変なものでした。やせこけた兵隊たちが、故郷に帰れるといつてうれしそうにはなしていました。

九月のはじめごろ、役場から戦争は終つたのだ、疎開者を迎えて行ける人は心配しないで行ってこいとの発表があつて、漁船で台湾へわたりました。家族は宜蘭からさらに台中のインリンというところに疎開していました。いざ帰ろうとしたら今度は船賃がたりない。池間の漁船だが、運賃は一人四百円、それに荷物も柳行李一個四百円。これらは十人家族に、ほるとはい柳行李は七つ八つはある。とても間に合わない。仕方がないから母と妹の二人だけ荷物をもつてさきに帰した。それから私は船賃をかせぐためにキールンで水道人夫になつてはたらいた。家内は子どもと一緒に駅の近くで今

沖縄を軍に理解させる

平良町東仲 下 地 騒（四二歳）

兵隊相手に郷土史を講演

わたしは昭和十八年の四月に米間国民学校から砂川国民学校に転勤しました。二ヶ月後の六七月ごろはじめて軍隊が宮古にきたと思います。はじめのうちはあちこちに防空壕をつくつたりしてましたが、城辺村では砂川の南と新里の境界附近やザラツキ嶺の下、西城国民学校のうしろあたりに掘つていきました。そのご軍は何回かにわかつて何千、何万と入つてきましたとと思うが、はじめて城辺村にきた兵隊たちはまるで外国にでも来たかのように「沖縄人は普通語がわかるか」「沖縄人は何人種か、支那人の子孫か」などと変なことをばかり言つていました。部隊長はじめ将校連がそんなことを言つたのです。そこで私の家で酒やサカナを出して歓迎会をひらき誤解を解くことにしました。部隊長の梶少佐はじめ将校が十名くらい

きました。そこで私はかねて研究していた沖縄県の言語や民俗、本土と沖縄県の歴史的な関係等について説明しました。そうすると梶少佐がびっくりしたような顔をして、城辺村役場に准士官以上を全員集めるからそこで改めてあんたの研究したもののはなしてくれ、講習をしてくれと言わされた。城辺村役場には三十名余りの将校連が集つたが、本土と沖縄が同一民族であることを「古事記」の記述や万葉詠等を引用してはなしました。「言海」の「大八州の神つままでさかねてさらにタイコウとなりて美人をまぎとる」などを引用、宮古方言とむすびつけてしゃべりました。なかにはいま考えたら眉付ぱともいえる滝沢馬琴の為朝渡来等についてもとりあげたが、当時はウソも方便どころか本気でそう考えたし、いかに沖縄県を正しく知つてもらおうか一生懸命でした。原紙を切つてプリントにしてくばりもしました。それからは軍の官古に対する態度はいくらか変つてきただように思います。

会の形式でやつたように思います。運動場に舞台を装置して児童も出れば兵隊も出るというふうにしてやりました。このときは山砲隊の兵隊は全員来て、職員にもいろいろおひっててくれたようにおぼえています。こういうふうにして兵隊とも非常にしたくなりました。私は昭和十九年十一月に城辺国民学校の埴花校長が視学になつて宮古支庁に転勤したので後任として城辺校にうつったが、そのとき兵隊たちが転勤を非常に惜しがつてくれました。

馬車で転勤の途中大空襲にあう

いの人はそこで難をさけていました。

ほくな家庭六人で長住宅でしたか。空襲がくると一日中 あるいは夜通し役場裏の防空壕でございました。住宅で寝ているとき未明に空襲でもあると相当だとえました。子どもは六年生をかしらに女の子ばかり四人、小さい子どもらをたたき起こして防空壕までかけ込むのは大変です。空襲を知らせるサイレンは学校にいる軍隊がならしていたが、一か所だけでなくあっちこちでも鳴っていました。建物がめだつのか学校にはよく爆弾が落ちました。しかしどういうものか校舎には命中せず、たいてい学校周辺で爆発していました。学校隣りの民間の庭に落ちたときは大変でした。真昼間二間四方くらいの小さな茅ぶき家に子どもらが十何名遊んでいました。二五〇キロ爆弾が半間くらいはなれたところに落ちたのです。反対側のデイゴの大木が根こそぎ倒れ、そこら一帯めちゃめちゃにされたのに、もつとも近くにある茅ぶきはどうもなく十名余りの子どもたちはみんなたすかりました。おそらく爆発するときの方向が茅ぶき屋に平行していただろうということでした。あれこそ奇跡だと思います。

すいと反対したと駄目でした。それから一二ヶ月してから、終戦になりました。終戦のはなしは沖縄戦が終らないところから聞こえていました。将校のなには日本は完全に負けるというのもいました。福里良夫君なんかは、日本は必ず負けると言っていたが、ぼくはそんなことはない絶対勝つと言ったのです。ところが福里君の言う通り負けてしまって、ぼくは徹底した軍国主義だったのかなと自分ながら思つたりしたのです。

した。建物がめだつたか学校にはよく爆弾が落ちました。しかしどういうもののか校舎には命中せず、たいてい学校周辺で爆発していました。学校隣りの民間の庭に落ちたときは大変でした。真夏間に二間四方くらいの小さな茅ぶき家に子どもらが十何名遊んでいました。二十五キロ爆弾が半間くらいはなれたところに落ちたのです。反対側のデイゴの大木が根こそぎ倒れ、そこら一帯めちゃめちゃになりました。もつとも近くにある茅ぶきはどうもなく十名余りの子どもたちはみんなたたかりました。おそらく爆発するときの方向が茅ぶき屋に平行していただろうということでした。あれこそ奇跡だと思います。

しかしんまり学校周辺にばかり爆弾が落ちるものだから、あとで軍も警戒してあちこちの防空壕に分散して行きました。しばらくして村会議員の玄仁たちが校舎をこわしはじめました。ぼくは校舎をこわすのは反対で戦場まで抗議に行つたけど聞いてもらえないなか

とにかく正体不明の时限照明显で、犯人は全然あがらませんでした。『御真影』を安置してある野原越の防空壕の近くからあがつた。

転勤の辞令が出たことを此いたのは十一月の二十日過ぎでした。家財道具を馬車に積んで砂川を出発したのは十二月上旬の未明。夜明けとともに敵機の大空襲が始まり途中何回か石垣のかけに隠れたり木の下に身をひそめたりして、ようやく城辺校の校長住宅にたどりついたのは夜の十時ごろでした。引越しの日が敵の大空襲にあたってしまい、ほんとうに生命からがらが逃げたものです。一里半そこらの道のりなのに十数時間以上もかかりました。砂川校はその年の四月に科学教育研究校の指定をうけて飛行機の模型や望遠鏡とか戦時関係のいろいろな教材教具を購入して研究をつけ、研究発表会の準備をしていました。それらの科学教材はすべて校長住宅の二番座においてあつたが、城辺校に転勤して三日めに空襲があつて爆弾が落ち、残っていた家財とともに全部やられてしましました。校内に立つていた歩哨も戦死するなど大変なことになってしましました。もしも引き戻しが少しでも遅れていたらと思うと何がしあわせかわからぬものだと思いました。おかげでぼくは《カシヌファク》(神の子)と言われたりしたもののです。

りするんだから、とにかく不思議でたまらなかつたです。兵隊たちも不思議がつっていました。ぼくも夜中に大声で叫んでみんなで包囲したが誰もいない。スペイがつかまつたという話は一回も聞いたことはありません。

食糧不足とマラリアに苦しむ

食糧不足で兵隊も開墾したり民家の畑を借りてサツマ芋を植えたりしていました。それでも足りなかつたから蛇も食べ、蛙も食べていました。あとは民家をも荒す。しかもしも民間のものが軍のものをとろうものなら大変です。一度などは十五歳くらいの男の子が芋ゾルを盗んだといって、真夏の炎天下に電信柱にうしろ手にしばりつけられたことがあります。城辺校の西南の角の電柱にしばられてもう息もたえだえになつたので、ぼくが嘆願して許してもらいました。

またあるときは作業に出ないといつて青年学校の女生徒三人を指揮台に立たせて罰していたこともあります。これも炎熱下に両手を高くあげさせて可哀そだったのに、このときもおねがいして許してもらいました。作業といつても軍の畑を耕したり防空壕を掘つたりすることですから、暑くてたまらなかつたのだろうと思います。福里はもともとマラリアのないことで知られていたのに、戦争中は実にマラリアが多かつたです。ぼくの家族も五人かかりました。栄養が悪いからかかりやすかつたのだろうけど、アメリカが、マラリア菌をまいたんだろうと思っていました。東という親切な軍医がいていつも注射をしてくれました。この人は終戦後もめんどうをみてもらつてゐるし、困ったなと思ったが仕方がなかつたです。

マ司令部への翻訳にあたる

終戦近くなつてぼくも栄養失調とマラリアでたおれました。東軍医のお世話をなつたが、少し元気が出てきたら宮古支庁によばれ、翻訳をさせられました。学校のことはやらないから宮古郡のためにはだらいてくれということで、東京の総司令部のマンカーサー元師あての文書を翻訳しました。松本という通訳もいたが、この人は直接古に關する翻訳はさせず、もっぱらぼくがやりました。多くは食糧配給に關するものだつたように思います。支庁は空襲で焼け、農業試験場にうつっていました。支庁長は納戸彌吉と言いました。三か月ぐらい学校には行かず平良から試験場に通いました。ときには通訳もさせられたが、よく筆談でしました。翻訳は無報酬でやつたように思います。

終戦の月の八月三十日に野原越で「御真影」を焼いたときはマラリアで寝ていたため城辺校からは教頭の奥平平蔵がぼくの代理で出席しました。

下地かおる日記抄

下地かおる氏は、博文館發行の中型當用日記を用いて昭和十七年～二十一年の満五か年、日記を書きのこしている。もともと氏は、師範学校在学中から日記の習慣があり、この五年間一冊に用いたのは、十七年を終えた段階で同様な日記を入手できなかつたことに原因するものらしい。同じページの余白、らん外を使つて公私さまざなことながらぎつしり書きしるされている。

ここでは昭和十九年十月から二十年九月までの一年におさえて、主として戦争と学校にかかる記述のみをぬき書きした。このころ氏は砂川国民学校長から城辺国民学校長に転勤している。

昭和十九年
十月廿八日

校長会（御真影御奉遷ノ件）

十月廿九日

一、平良宅に白菜、大根をまく

二、部会の車にて野原越（御真影防空壕）迄

一、三年以上活動（ハワイ、マレー沖海戦）見学

二、番小屋をつくる

十一月一日
官中へ当校ノ御真影ヲ御奉遷ス

十一月二日

一、官中より御真影奉遷所へ御奉遷無事終る

（1）午前十時官中出発の予定なりしも雨天のため午後一時に変更す

（2）午後一時半自動車にて野原越奉遷所へ御奉遷す

二、奉遷後直ちに帰校（教頭目録を持って平良へ）

三、待望の雨しきりに降り続く。朝から夕方迄降り続く

十一月三日

一、明治節ノ遅粧式挙行
二、部隊演芸会開く

十一月六日

五年以上綱作り

十一月七日

五男以上綱ナヒ、高等女芋麻収穫

十一月十日

一、雨降、授業休ミ
二、職員打合
三、出席督促

十一月十一日

相当量ノ雨降、授業無シ

十一月十四日 火

一、午後二時より校長会（旧図書館）
1、鍛成会ノ件（延期）

2、家畜増強ノ件

3、伍長、軍医中尉、郷土史ノ事ヲ聞ク

十一月十五日

一、野原越迄トラック利用

二、御真影御調査、各種ノ設備スペキモノ協議

十一月十六日 木

一、朝から雨降り続く 授業休む

二、職員は午後から警動

三、新里校五六二〇部隊の軍医中尉甲田勝夫氏曲玉研究の為來校、曲玉の研究と南支那貿易研究の原稿借用

四、警戒警報發令

十一月十七日 金

一、高学年偽装網つくり

二、合同慰靈祭挙行（七柱）僧侶モ來テ燒香ヲナス、國のためといへほんとに氣毒

二、友利少年団常会開催

十一月十八日 土

一、各字ノ偽装網つくり状況巡視

十一月十九日 日

一、各字ノ偽装網つくり状況巡視

十一月二十日 月

一、友利ノ網状況巡視

十一月二十一日 火

一、雨天ニ付休業

十一月二十二日 水

一、出平

十一月二十三日 木

一、御真影台帳（平一校長）

三、上等靴、川満恵隆ヨリ贈呈

四、山内朝源君面会

五、友利少年団一ツノ偽装網夜通シカカツテ完成

十一月二十四日 金

一、欠席生徒督促

2 偽装網繩供出

3 ニューギニア、パラオ方面ノ敵機動部隊新作戦行動ヲ開始

セルモノノ如シ、敵重警戒ヲ要ス

十一月二十五日 土

一、低学年授業參觀

三、砂川少年団常会

四、西本少佐と飲酒（奥平君を叱ってゐた）

十一月二十六日 日

一、朝カラ農場ノ芋ヲ取ル、四五斤

十一月二十七日 月

一、城辺校へ転任セシ由、久雄君から聞いて驚く、寝耳に水とは此んな事でせう。垣花恵昌君視学へ。

十一月二十八日 火

一、雨天ニ付休業

十一月二十九日 水

一、校長会

二、新旧親学歓送会

十一月三十日 木

一、帰校

二、送別会

十一月一日 金

一、職員打合会

二、雨降授業無し、昨夜より降り始む

十一月二日 土

一、臨時賞与内申、使丁出平

一、各種公金整理

二、授業無し

十一月四日

一、防空壕当番と思つたが明日だった。高里君も間違つて防空壕を行つたとか。星頭戻つて來た。

二、報國農場に麦を蒔く

三、農場の芋収穫

四、夜、区長会召集、佐和田氏ノミ来ル

十一月八日 金

一、記念式（大東亜戦争勃発三周年記念日）

二、本日馬車二台ニテ出発赴任、職員（處正）同道

二、郵便局員保険通帳調ニ米タル（喜之助疑問？）

三、将校連職員室にて魚釣ノ話、ヤラブ油ノ話

十一月二十二日 水

一、出平

十一月二十三日 木

一、御真影台帳（平一校長）

三、上等靴、川満恵隆ヨリ贈呈

四、山内朝源君面会

五、友利少年団一ツノ偽装網夜通シカカツテ完成

十一月二十四日 金

一、村内校長会 1他県視察の件 2旅費支払ノ件 3使丁給料ノ件 4隣校会費納入ノ件 5欠席児童ノ件

二、無断デ松木を伐採シツツアル〇〇へ対スル非難ノ声高シ、其様ナ状態ナラ來年ハ燃料飢餓ニ陥ルコトハ明ラカデアル、然シ勝ツタメナラ又何ヲカ云ハニヤデアル

十一月二十五日 土

一、朝カラ農場ノ芋ヲ取ル、四五斤

十一月二十七日 月

一、城辺校へ転任セシ由、久雄君から聞いて驚く、寝耳に水とは此んな事でせう。垣花恵昌君視学へ。

十一月二十八日 火

一、雨天ニ付休業

十一月二十九日 水

一、雨降り

二、子供等引越シテ來ル

三、警戒警報發令石垣島東南方ニ敵機動部隊近ヅキツツアリ

十一月三十日 月

一、警戒警報發令中ニ付授業無シ

二、職員一同ニテ新任教員ノ歓迎会ヲ催ス

十一月二日 火

一、警戒警報中休業

二、事務引継 公金一三一、一二預り

十一月十三日 水

一、職員部落出張

二、警戒警報發令中休業

三、青年学校挨拶

四、部隊長挨拶

十一月十四日 木

一、警戒警報本日午前中（九時迄）解除

十一月十五日 金

一、雨降り続く、休業、郵便局ニテ畠暮

十一月十六日 土

一、「闇をやるな、闇酒をつくるな」と強調しているが、其の根本ノ原因を打破せざる限りは、其の絶滅は困難である。

十一月十七日 日

一、雨降り、御真影防空壕當番

十二月十八日 月 雨降

- 一、午前中御真影防空壕当番
- 一、午後砂川校長住宅へ行く、中食、砂川婦人常会とて恵信

君、饑平名君等と出かける

- 一、敵ミンドロ島に上陸を聞く

十二月二十日 水

- 一、児童出校、早朝軍医中尉石原佑来
- 二、赴任式ヲ挙グ、百名ニモ足リズ

三、演芸会ノ練習

四、福里君ト団碁

仮教室の相談ニ歩ク

十二月廿三日 土

- 一、記念植林（皇太子殿下御誕生記念日）五、六年
- 二、長谷川少尉ニ宣古言語ヲ語ル

三、仲宗根玄一君赴任式

四、小生ノ歓迎会（役場ニテ）

五、住宅で七、八名懶し飲む

六、曲玉発表ヲ聞ク、痛快

しきりに雨降る（植林途中）

十二月廿四日 日

一、御真影奉遷所校長会

一、臨時賞与、私八二、ヨシ二四、所得税私一二、三〇 ヨシ

三、六〇、合計九〇円一〇銭

十二月廿一日 日

- 一、空襲警報発令
- 二、職員会、年末賞与發令セズ
- 一、空襲警報で昭和十九年も暮れる。
- 二、物価は高騰、巻上りの状態・俸給生活者の困り年、〇〇の盜人の根性發揮、之が統けば如何になりゆく。
- 十九年十二月末現在、豆一升五、六円、豚一斤七円、鶏一斤七円、卵は七〇銭又は一円、砂糖一斤一円五拾銭（二円、芋十斤一円五拾銭）二円、物品無きため店は閉鎖（疎開のため）昭和二十年

一月一日 月 晴
一か月も続いた雨がからりと晴れて、うららかな天気になつた。校舎は転用のため使用出来ず、裏の運動場で遙拝式を行はず、住宅で宴会を職員のみでなし、酒の逃避行をかねて島尻、仲宗根玄市の所で廻礼をなす、野越の兵隊たちのトラックで帰る。時局にふさわしい正月。

一月二日 火
一、職員出勤一所得税申告

二、戦車隊の演芸会、国民学校よりも出演

一月三日 水
一、教頭の代りに御真影奉遷所の当番に行く。

空襲警報あり、敵機十二、三機米襲セル由、内一機不時着、保良二、三糸射撃をうけた由

一月四日 木
一、御真影奉安所当番（午前中）

一月十日 水
一、警戒警報発令授業無し

一月十一日 木
一、警戒警報発令（七時卅五分）

一月十九日
一、校長会（御真影奉遷所）

一、頃花視学、糸洲氏共に福里へ（中食共にす）

一月二十日 土
御真影防空壕当番

一月二十一日 日
一、午前九時より十一時卅分迄空襲

二、午後一回、夜一、三機米襲、防空壕当番

一月廿二日 月
一、午前七時ヨリ空襲アリ（前後二回）

一、午後二回米襲

一、夜空襲警報（子供達防空壕ニ眠ル）

一、警戒警報発令、授業無シ

一月廿九日
一、五年以上勤労作業（比嘉）、引率者＝仲宗根、キミ

二、空襲警報発令（作業中止）、平良方面ニ來襲セシ由

一月卅日
一、五年以上作業＝福里、福里、西里引率

- 一月九日 火 雨
一、午前一時過より防禦警報（敵機襲来）十二、三キ、被害状況
1支庁ヘ銃丸 2海飛行場、大型四、小型一五 3中飛行場大型
二、小型一二、4ソンマ＝民家大型一、5下里添娘高射砲弾負傷、◎マダノ線デ米英軍降服

二月三日 土

一、青年学校ニ於て「民防衛隊設立」清良君引率、「田埋立」ニ対スル講話アリ、池間中尉、勝木少佐、西堀大尉「六月頃、米は南西諸島の一角に上陸する」と発表せりとか。

二月四日

雨ジメジメ降る、温度一二、三

二月六日 火

一、防空壕当番、午前二時敵機B24来襲

二月七日 水

一、防空壕当番

二月八日 木

一、防護警報発令（敵機襲来？）

二、奥平、高江洲作業引率

二月十一日 日 雨

一、紀元節遙拝式

二、演芸会

二月十二日 月

一、午後三、四時頃平良へ着く（勝太郎も共に）

二、教員採用の件のため出平なり、年末賞与審定中の視学と

面会（十三日午前）、僕のは二八〇円

三、池村恵章氏御見舞、重態に見える。池村恒章の所へ寄る

四、フイリッピン戦況は好調

二月十三日 火

一、出平、空襲防護警報と共にB29現はる、しきりに機関砲の

音聞ゆ、暫らくして二機で追跡、追いつかず友軍二機は引返す、屋根の上にてみる。

二月十四日

来るべきもの來れり、覺悟の上だ

一、早朝より警戒警報発令、午前九時過空襲警報発令、引続防

禦警報発令、夕方頃空襲警報解除

二、事態急を告ぐ。役場に池間中尉来りて参謀長よりの電報とて「有力なる機動部隊が西南諸島に進行中なる事」を告ぐ、「飛行機の大規模の来襲が予想せらる依つて食糧、衣服等完全な防空壕に入れられたい云々」

三、其の由を経理部の人達にも知らず、次に前の家に知らず、児童を集合させて告ぐ

四、防空壕に荷物運搬（重要書類）、部落の集会

五、「ヴィシー諸島を敵機動部隊は既に出发し其の大部は南西諸島へ、小部分は小笠原諸島へ遊行中だとの事」若し宮古へ上陸を企図するなら後十五日か二十日の内に敵機動部隊は現はるだろう。然して其の何日か前から牽制空襲が大規模に行はれる故嚴重に注意を要する。

六、敵は十万以上と考へる、此の小さい宮古に十万の敵兵！「玉碎も時には覚悟」

二月十五日

一、悲観的觀察を下すのが郵便局長や恵令氏、僕は大丈夫負けることはないと信する、ヴィシー諸島を北上する敵機動部隊は宮古には上陸せないと思ふ、宮古に其土地を求めると仮定しても、

如何にして日本本土を空襲するといふか問題だ、恐らく沖縄本島か薩南諸島ならんか。

二、空襲警報発令、B24来襲、海軍監視所に爆弾を投下せし由

二月十六日 金

一、敵機来らず

二、硫黄島の戦果、1航空戦艦等併せて十四隻轟沈、九隻大破炎上、2墜落一〇一キ、我方損害未帰還機百

◎南西諸島、宮古辺りに来ることを予想された敵機動部隊は硫黄島に於て捕獲されたらしい。

二月十七日 土

一、敵機来らず

二月十八日

一、防空壕を掘る

二、徳島に来たのか（敵機動部隊が）或は房総半島に来たとか、様々の噂、

三、敵機来らず

二月十九日 月

青年会場掃除

二月廿八日
敵機来ラズ
戰車隊長來校
福東ニ与那朝千代招待

三月一日 木

一、空襲、防護警報発令（午前八時頃）、朝敵機二機、午後一

三月廿七日 火

一、御真影防空壕当番

一、防護警報発令、十時頃、一時半、二時半、四時半

三月廿八日 水

一、修了式、修業式

一、式中、飛行機四キ会場の上空を飛翔敵機だといふので其の儀伏せ、後で日本機と分り離つた。

三月卅日 金

僕の周囲には現時の戦争に関して悲観説と樂觀説を持つてゐる者がある、○○○○や△△△は悲観説の尖頭であり、僕や島田氏等は樂觀説の方である、事毎に悪く解釈するもの、事毎によく解釈するもの、どっちみちつかずのもの、色々である、フィリッピニに対してできえ悲観的のものもある、沖縄上陸をも悲観的に考へてゐる。僕は丸つきり反対だ。フィリッピンも山下大将閣下の強い放送によつて大丈夫と思ふし、又沖縄本島でさへ防衛隊も何十万と居るから、軍と力強く協力すれば敵をゼン滅する事は大丈夫と考へる、若し宮古島へ来るとしても、そな敵の兵力は多くはあるまいからせん減し得ると信ずる、敵も馬鹿ではないからこんな強固な陣地の築かれ又兵力も相当居る宮古には上陸すまい、万々上陸すればばらしい兵力で大激戦になるだろう。

三月卅一日 土

一、防護警報発令（午前七時二十分）第一回B24、一日中英機が四キ飛ビ廻ル

四月一日

一、敵機朝より飛ブ、三時頃八機中一機墜

四月二日 月

一、防護警報発令、敵機十機（朝）来襲

一、授業無シ

四月三日

出、東海岸と西海岸とを結ぶ線確保

四月八日 日

○四月一日以降今日迄授業なし

一、防空壕当番

一、午前二回防護警報発令

一、夜間爆撃もなす

一、敵機は日本機にまぎらわすため三色の点灯を以て飛行場に現はれ探照灯に照らされ悠悠爆撃する

四月九日 月

夕方より雨降り始む

一、父母の様子と親類の安否を気遣い未明に防空壕を出て途中鏡原郊外で敵機に発見されたが、運よくタコツボ見つけそれに入り込むと敵機の機銃爆弾で見舞はれ、運よく命を助かつた。近くに五十キロや少し遠く三百五十五キロ等が爆発した。又海軍部隊附近で草木の中に頭をつつみ又々機銃や爆弾に見舞はる、やつと平良にたどりつく、伊集君に出会ふ、池村君の所、河上に寄る、防空壕に居るとピューンピューンボンボン敵機はまさに次第次第家に近づく、やつと爆弾を免る。般若心經をとなへ機銃に当らざるやう読経す

四月十日 火

一、敵機襲来、病院の裏の暮舎等も機銃に見舞はる。よい雨で増産に精出す積りなのが機銃に邪魔される。

二、昨日の夕方（平良出発と同時）より降り始めた雨は今日も引き続き降っている。ほんとの豊年だ、「神在せり」の叫び。

一、早朝防護警報発令（五十余來襲）朝ヨリ十二時迄来襲、午後モ引続米製

◎授業無シ

四月四日 水

一、魚釣一匹モツレズ

二、平良ノ被害甚大（昨日の午後四時空襲）、山田、新世界、頃花アンマー宿、大原、河上附近小屋毛附近、宮古神社附近

四月五日 木

一、未明ヨリ敵機来襲、午前三、四回午後モ三、四回

二、福里芳一氏宅デ五名（頃花祝学、主人、勝太郎、僕、局長）無駄話

三、戦車隊ノ手島准尉ヨリ時計、テグスリヲ貰フ、釣糸ハ借用、國吉君ノ所ニ出ル、網の相談、久しうぶりに雨模様、雨待つ事久し

四月六日 金

一、福里宇内に居て敵機のため戦闘競競としているよりは魚釣よからんと一人出かける。然し海岸に居て魚釣しながらも敵機を警戒せねばならない心労がある。

二、一匹も釣れず、四機現はる

三、夕方亭主の所へ行く、手島准尉と話す

四月七日 土

一、内閣總辞職、鈴木貫太郎海軍大將ニ大命降付

二、四機又は六機で宮古の上空を暴れ廻る（午前三回、午後三回）

三、敵沖縄本島を中断、残波岬ヨリ嘉手納、泡瀬、島袋方面進

四月十四日

一、敵機来らず、友軍機昨夜ヨリ多數飛翔ス、ホットスル

一、午後民防衛隊猶予者の集合に参加（西城校の騎部隊）免除になる

一、敵機（午後三時迄）十五、六キ来襲、中一機墜

四月十五日

一、朝から敵機のさばる（十二機）

一、海にゆく、引切りなしに敵機が来るのでどうとう入れなかつた。其の儘戻る

一、敵機（午後三時迄）十五、六キ来襲、中一機墜

四月十六日

一、早朝ヨリ防護警報発令

一、早朝ヨリ防護警報発令

一、早朝ヨリ防護警報発令

一、早朝ヨリ防護警報発令

一、早朝ヨリ防護警報発令

一、御真影奉還所當番、福里君ト午後四時過出発途中二回トモ敵機二会フ、木ノ下、草中に隔ル

一、同右ハ平一校小林玄和君ト伊志嶽忠典君ナリ

一、早朝ヨリ一日中、更ニ夜ニカケテ敵機襲来

四月廿二日 日

一、早朝ヨリ夜ニカケテ敵機襲来（住宅ニ一発、役場多数）

一、空中戦アリシ由（御真影防空壕ノ中ニテ状況不明）

一、帰校の途中長間局前ニテ敵機ニ会フ、ロケット砲ヲ放チ真善氏等ト隠ル

一、福嶺校長ト交代

四月廿三日 月

一、早朝ヨリ敵機襲来一二機

一、防空壕略完成

四月廿四日 火

一、早朝四機、暫ラクシテ多数來ル

一、防空壕ニウツル、久シブリデユツタリトシタ氣持トナル

四月廿六日 木

自家防空壕完成

四月廿七日 金

一、早朝ヨリ多数來襲

四月廿八日 土

一、早朝ヨリ来襲（三、四キ）

四月廿九日

一、天長節ナルモ敬賀式雨ノタメ出来ズ、始メテノコトナリ。

今日の空襲はわざわざか特にはげしい。

四月三十日 月

一、絶間ない空襲、民が悲鳴をあげている。

二、夕方頃校庭に爆弾二個、校舎西側に三個落下別状無し

三、平良へと西城の西側迄歩く、夜間空襲にて帰校、（西城校

舍四棟焼ケタル由）

一、今日も未明より空襲、今後食糧事情が思いやらる。

五月一日 月

一、しきりに空襲、学校の表へ爆弾六個、字内五以上

五月四日

十二時頃飛行機がしきりに上空を飛び、ドロンドロンの音継続して聞ゆ、始め高射砲と思つたが連続しているから艦砲射撃なりやと疑始め愈々敵上陸かと驚く。

五月五日

一、四、五機で繰り返し空襲

二、沖縄本島で総攻撃を開始し、昨日午前四時連合艦隊も出動した由

五月八日

一、昨夜より降り続いた雨は今朝本降りとなる（大雨）

二、敵機来ラズ、ユツクリとした気持

五月九日

一、敵機の最高三十キ来襲

五月十日

午後敵機十二キ来。昨夜の砲音は？

五月十一日

一、高江洲、上原防空壕當番

二、空襲

五月十二日

一、朝二、三キ来襲

二、絶へず空襲

五月十三日 日

一、昨日程に劇しい空襲シラズ

五月十四日 月

一、午前伊良部武次開眼、読経ヲナス

二、魚釣、海岸ニ爆弾、校舎東爆弾二五〇キロ

五月十五日

一、敵機煙をはいてゆく

五月十六日

一、御眞影当番（福里清良君と）

五月十七日

一、ボーリング24、低空にて南の方へ飛んでいた。

二、本日午後四時頃雨降り始、午後八時交替、雨にずぶぬれして帰校。

一、敵機全ク来ラズ

五月十九日

一、敵機来襲来ラズ

五月二十日 小雨降る

一、敵機十機以上の音聞ゆるも雨雲のため見えず、飛行場方面機銃や爆弾の音あり。東海岸を二機北に向ひ、新城、保良方面に機銃の音あり